



白鳥バレエを支える後援会のコミュニティー

スワンレイク

Swan Lake

Vol.9

Issued in
June 2024

75周年記念特別号



白鳥見なみ

特集

バレエ人生75年の
軌跡を綴る

Successor

承継者たち

白鳥五十鈴 / 柳元隆太郎
伊地知真梨 / 大茂ソニア

75周年記念イベント

2024 ■ 白鳥バレエ創立75周年記念公演
11/30 「Life Life Life!!」～白鳥の航路～ swan route
川商ホール／第1（鹿児島市民文化ホール）

2025 ■ 白鳥バレエ創立75周年記念祝賀会
3/9 城山ホテル鹿児島／エメラルドホール

白鳥バレエ75周年に寄せて

白鳥バレエ後援会 会長 津曲 貞利

白鳥バレエがついに今年創立75周年を迎えた。自分の年齢を遥かに超えるその歳月に、唯々ため息が漏れる。クラシックバレエ白鳥会は舞踏家鳥克平・長野トキ夫妻によって1949年に創立されたが、その後1955年、ご夫妻の離別により当時僅か16歳だった有馬美代子さんは師より白鳥みなみの名を授かり、会の存続を託された。高校一年生で会の責任者になってしまったみなみ先生は、想像を絶する努力とそれを遥かに凌駕するバレエへの情熱によって、今日まで白鳥バレエを引っ張ってこられた。愛娘五十鈴さんが踊手、指導者として立派に後継を果たしているものの、75年間をほぼ一代で、しかも未だに現役で舞いながら時を刻み続けている芸術団体を私は知らない。それもただ単に存続しているのではなく、常に新しいことにチャレンジし、創作バレエ「ヤマトタケル」を引っ提げて文化庁主催芸術祭に参加、東京公演を果たして日本バレエ界の度肝を抜き、その後も数々のオリジナル作品や古典の名作を全国各地で上演し続けた。みなみ先生ご自身も鹿児島で団員を指導しながら昭和50年にはヨーロッパ・モスクワに留学して腕を磨いた。

絶え間ない創作活動と巡回公演、地方でのバレエ啓発事業は高く評価され、文部科学大臣表彰、鹿児島県芸術文化奨励賞(後に五十鈴さんも受賞、親子二代で受賞者となる。)、南日本文化

賞、そして平成16年には鹿児島県民表彰など数々の栄誉に浴された。地域に生まれ、地域の人々とともに、地域の歴史と民俗を題材にして、自ら創り上げる芸術にこだわったこの75年はそのままだ鹿島のバレエ史であり、総合舞台芸術の歴史でもある。心からその長い営みに敬意を表したい。

白鳥バレエがみなみ先生を中心に、並々ならぬ情熱と弛まぬ努力を以てバレエ団の成長と発展に全知全能を傾けてこられたことは衆目の一致するところであるが、同時にこれまで長きに亘り公演を待ち焦がれるファンや支持者、先生と慕う生徒、スタッフなど支援者の熱意と愛情がなければこの組織が今日を迎えることはできなかっただろう。そういう意味においては、この75年はまさにチーム白鳥の軌跡でもある。この場を借りて多くの支援者の皆様に心より感謝申し上げるとともに、これからも白鳥みなみ先生とその後継者である五十鈴さんともども、76年目に向けて軽やかに舞うパ・ド・ドゥをご一緒に演じていただければ幸いである。



100周年を目指して

白鳥バレエ 団長 白鳥五十鈴

75周年を迎えた今年、後援会再発足から10年を刻むことができましたことをここに厚く御礼申し上げます。3年間のコロナの脅威を乗り越え、その中でも上演活動を続けてこられたこと、皆様に応援頂きながら休むことなく上を向いて育成と上演活動に熱中出来たこと的幸福を感じております。

私たちは、日々「次の舞台」のために命燃やして過ごしていて、一人で勝手にそこで踊るのは違う、沢山の準備を要します。何かを感じる、見ること、知ること、経験全てが自分の身体に貯まり舞台上に表出します。考えてみると、私のアンテナは舞台上演のために使われて、日々何かを探し、これだというものに出会う機会を望んで過ごしているのです。昨年1月の本公演「楽しい劇場へようこそ!!」Vol.2は、出来る限り音楽やイメージに忠実に向き合い、総合的にプロデュース振付に取り組むことが出来ました。

今秋11月30日には、それを更に自由に発展させ「Life Life Life!!」というバレエを上演したいと思っております。バレエに全てを捧げ踊り続けてきた白鳥見なみそのものと、バレエ愛を込めて自分も見たい舞台を創作します。これを作る中、共演するダンサー、スタッフ全ての人が、生き生きと作品の成功のために一途に取り組めるような、そんな創作の機会にしたいと思っています。

昭和、平成を駆け抜け、今も変わらぬ微笑みと厳しさと、稽古場に君臨する白鳥見なみは健在です。「不死鳥」はその舞台に必ずや舞い降りるはず。100周年までにまだまだすることがあるようです(笑)



白鳥見なみ

Minami Shiratori



- 「永遠の一瞬」収録より…………… 3
- メモリアルシーン…………… 21
- 寄稿（川越政則氏・高柳守雄氏）…………… 25
- 白鳥見なみプロフィール…………… 28
- 白鳥バレエ75年の軌跡…………… 29
- 公演ポスター…………… 35
- 母娘トーク…………… 37
- 白鳥バレエ・レパトリー…………… 39
- 白鳥見なみご挨拶…………… 41
- 継承する者たち…………… 43
- 後援会について…………… 49
- 活動予定と活動報告…………… 53

永遠の一瞬

Contents



南日本新聞掲載 連載コラム「永遠の一瞬」より
(当時) 南日本新聞社文化部長 原田茂樹 責任編集

白鳥見なみ物語

2018年01月28日から2019年04月28日まで1年4ヶ月の間、
毎月第4日曜日に南日本新聞に掲載された白鳥みなみの物語。

- 01 種まきの時代 …… 魂の踊り 16歳で後継
- 02 芽吹き時代 …… プリマの気概で踊る
- 03 20周年公演 …… 意欲に任せ突っ走る
- 04 中央進出 …… 創作発表へ団員一丸
- 05 文化庁芸術祭 …… ヤマトタケルを熱演
- 06 転機 …… 巡演重ね大きな実績
- 07 実験 …… 夢企画で魅力を伝える
- 08 留学 …… ライバルは「10センチ」
- 09 シンガポール公演… 忘れられない喝采
- 10 巡回公演 …… 古典の大作を届ける
- 11 新たな作品 …… 平家を題材に雅な世界
- 12 高評価 …… 愛された一大叙事詩
- 13 ロシアとの交流 …… 刺激受け大きく成長
- 14 60周年公演 …… 洗練極め最後の舞台
- 15 集大成 …… まだ成長し続けたい
- 16 寄稿 (五十鈴) …… 心に焼き付く舞台を
寄稿 (原田茂樹)… 一瞬を刻み、さらに飛躍を

鹿児島県に初めて本格的なバレエ教室ができて70年(掲載当時)。鹿児島市の白鳥バレエで長くプリマドンナを務め、今は指導育成に当たる白鳥見なみが、自身の歩みと鹿児島のバレエの始まりについてお話しします。

あらゆるものがテレビやパソコンの画面から刺激的にあふれだす現代、日本には世界中の芸術が到来し、どの劇場でもいろいろな団体が発表会やコンクールを開けるようになりました。ダンサーも舞台技術者も、たくさんのプロが育っています。

日本のバレエは民間から始まり、民間の応援により根付きました。地方の場合もそうです。1949(昭和24)年、鹿児島にバレエの種をまいた最初の人物がいました。旧満州ハルピンから引き揚げてきた種子島出身の島克平氏と、長野トキ子氏ご夫妻です。お二人はバレエ研究所「白鳥会」を開設なさいました。



※白鳥会の第1回発表会(1949年 鹿児島市中央公民館)

人一倍、一生懸命するぞ、という覚悟の言葉だったのです。小学4年のときでした。

すばらしい先生でした。一番最初に上演したのが、大作であるベートーベンのピアノソナタ「月光」や交響曲第5番「運命」。あの時代が私の独創性の源だと思います。私の独断ですが、島先生が親しみやすく共感を覚える作品を生みだせたのは、脚本家であり、演出家であったからです。

私は中学卒業後、バレリーナを目指して東京へ行こうと心に決めていました。「日本バレエの父」と言われる小牧正英先生がいらっちゃったからです。小牧先生はハルピンから帰国して46年、東京で初めて本格的なグランドバレエ「白鳥の湖」を上演されました。

鹿児島にはそれまで、洋舞踊しかありませんでした。呉服店の長女に生まれた私は体が弱かったので、3歳から洋舞に親しんでおりました。現代舞踊の草分けである石井漠氏の系列の豊倉舞踊研究所に通いました。

映画が好きだった母・有馬エミは、パリ・オペラ座を舞台にしたフランス映画「白鳥の死」のミア・スラヴェンスカのバレエを見て「こんな美しいものがあるだろうか。女の子が生まれてたらこれをさせたい」と思ったそうです。そうして私は、できたばかりの白鳥会に入所いたしました。

私は104番目の生徒でした。1年目で100人以上の生徒が集まったわけです。私が最初に言った言葉を、島先生がおかしそうに聞いていたのを思い出します。「私には特別に教えてください。」誤解のないように弁解させていただきますが、バレエを

ですが、島先生ご夫妻が鹿児島を離れることになり、跡を継ぐように言われたのです。私が躊躇していると、母が「あなたが継がなければ、先生のまかれた種・鹿児島のバレエはなくなるのよ。跡を継ぎ、東京に通いなさい」と後押ししてくれました。私は鶴丸高校に進学し、1年生、16歳のとき、白鳥会の2代目となりました。そして小牧先生の元に通いました。

私の師は島先生ご夫妻や小牧先生です。「皆の心が豊かになることをしたい」というエネルギーは大きかった。戦後間もなく「芸術」をやっていたのです。60年前の話ですが、日本のバレエを創ろうとした系譜を、私はここで語る必要があります。魂のバレエを追求した先人を伝えることは大事なことだと思います。

16歳、目まぐるしい日々が始まりました。鶴丸高校1年生だった1955(昭和30)年、バレエ研究所「白鳥会」の主宰を引き継いだのでした。

バレエの指導にあたった先は、鹿児島市だけではありませんでした。戦中、私たち家族の疎開地だった国分にも支部を置きました。夢中で、考える余裕もなく、ひたすらバレエと学業の毎日。汽車の中、電車の中でずっと勉強し、到着すると稽古。それでもちっとも苦しくはなく、楽しかった。夢と責任で燃えていました。

幼い私が偉大な師から志を受け継ぐのは、大変なことでした。白鳥会を開設された島克平先生は、戦後間もなくオーケストラで本格的なオリジナルバレエ「創造」を制作なさいました。巡回公演の始まりと言える活動もし、種子島で公演したのを覚えています。

私のもう一人の師、東京の小牧正英先生の偉業も伝えなければなりません。先生は海外で上演された作品を、装置、照明、陣容全てで最高の状態で、日本にお伝えになりました。「シェヘラザード」「眠れる森の美女」「バラの精」「イーゴリ公」など、本を見ても写真を見ても、その頃最高峰のソ連での上演に劣らないものです。「日輪」などの創作バレエもそうです。また外国から錚々たるダンサーを次々と招かれました。日本バレエをレベルアップなさったのです。

私は列車で24時間かけて、小牧先生のバレエ団がある東京・洗足(目黒)に通いました。母がおにぎり、卵焼き、さつま揚げを入れたお弁当を持たせてくれました。お母さん子だった私は、泣きながらそれを食べ、つかの間の別れを噛みしめました。北九州を過ぎる頃に泣きやんで、稽古に向かう心へと切り替わりました。

その頃の小牧バレエは、熱心な気鋭のバレリーナたちで溢れていました。そこへ地方から行っているのですから、競争心しかなかったと思います。同じ門下生から「鹿児島って身近にお猿が出てくるでしょ?」と言われ、辺地のように思われていることが悔しかった。「あなたたちが満員電車に乗っているとき、私たちはお稽古できるのよ」と言いました。

1979年、小牧先生の創作バレエ「やまとへの道」が、日本バレエ協会フェスティバルとして東京文化会館で上演されました。主役は当時大活躍のプリマ本田世津子氏でした。私は第3幕の佳境、ただ一つの個性的なパ・ド・ドゥ(2人の踊り)を頂きました。



※創作バレエ「やまとへの道」で、舞台上の90人に見つめられる中、パ・ド・ドゥを踊る筆者(1979年、東京文化会館)

本当に嬉しかったです。たった一人の地方からのダンサーが、大きな役を射止めたのですから。忘れもしません。

リハーサルのとき、オーケストラが契約時間切れを理由に、第3幕の前で帰ってしまいました。私の相手役の男性は「ダンサー生命を断たれるから降りる」と言い出しました。私は「地方からわざわざ出てきて、この舞台を失うわけにはいかない」と強く思い、「音は頭の中に入っている。私について来てくれれば大丈夫」と言いました。

さて本番。第3幕では舞台の上を東京勢90人が取り囲みました。私とパートナーのリフトを180の目がじっと見つめていました。舞台上の見えない戦いでした。プリマの気概で踊った覚えがあります。あの一瞬に私の人生がかかっていた。今思うと、鹿児島でプリマとして年に何十公演もやってきたプライドや積み重ねのおかげで、乗り越えられたのです。

そうやって走り続け、もう70年になろうとしています。

私が鶴丸高校(鹿児島市)を卒業した1958(昭和33)年、創作バレエを始めました。

私が引き継いだ「白鳥会」は55年、名称を「白鳥バレエ研究所」へと変更しました。創作に取り組んだのは、私たちの団員を生き生きと踊らせるためでした。

今考えると、大変珍しい、私にとってありがたいことがありました。卒業記念発表会を、鶴丸高校の後援で行うことができたのです。当時の校長先生のお取り計らいがうれしかった。



※「白鳥の湖」初演時のメンバーと白鳥見なみ(手前左から3人目)

校長先生は厳格な教育家でした。高校2年のとき、「種子島に巡回公演に行くので学校を早退させてほしい」と願い出たところ、「ここは勉強をするところですよ。それはできません」と言われました。学校から急いで港へ向かい、種子島行きの船に片足を入れた途端、岸から離れました。今でも夢に出てきます(笑)。校長先生は卒業したとき「よく両立なさいました」と言ってくれました。

卒業記念発表会は、鹿児島市の山形屋劇場で開き、盛りだくさんの創作オンパレードとなりました。チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」を使った、姫と龍王の悲恋物語「ラインの悲歌」。牛若丸と弁慶の五条橋での出会いをバレエ的に創作した「初秋の幻想」。童謡「かなりや」をアレンジした「カナリア」。そして「タベ野路にて」の4本立てでした。

「タベ野路にて」はその年、福岡での西日本合同祭で上演しました。西日本新聞の学芸部長に「これから九州を背負って立つのは白鳥だろう」との評価を頂きました。郷愁をそそる温かい作品だったので、きっと気に入られたのだと思います。その方は評論家として通っていらっしゃる方だったので、うれしかったです。

若い者への評価にやっかみもあったのでしょうか。記事掲載の後、わざわざ鹿児島にいらしておっしゃいました。「嫉妬は多いでしょうが、頑張ってくださいね」と。日本のグランドバレエを作曲し創作するようなバレエ団は、九州でほかにありませんでした。

鹿児島にバレエの種がまかれ10周年となる1959年、白鳥バレエ研究所の支部を鹿屋に置きました。また、鹿児島初演となる「白鳥の湖」と「ジゼル」を鹿児島市の中央公民館で披露しました。

プロダンサーを育てるために十分な練習時間が必要でした。62年、団員がアルバイトできるようにと、バレエ研究所で製菓会社を造り、工場を練習場の横に建てました。団員は仕事を早く切り上げ、練習に励みました。



※「ジゼル」を初演する白鳥見なみ(1959年)

10周年は無謀ともいえる欲張りな公演を県文化センターで行いました。初日に「白鳥の湖」、翌日に「ジゼル」と大作2本を連日で上演したのです。29歳のときです。

公演を前に霧島市のお寺で合宿をしました。朝は実技を、夜は表現力を教え、「ジゼル」の狂乱の場などをゆっくり指導できました。一日中「白鳥の湖」を猛練習した後のこと。皆疲れてぐっすり眠っていると思って、最後の見回りをしました。リズムミカルな声がするので雨戸をそっと開けて見ると、4羽の白鳥たちが庭で夢中になり練習をしていました。そのとき、公演の成功を確信しました。

その確信の通り、公演は大好評でした。プリマはどちらも私1人で務めました。意欲に任せて突っ走ったのです。

その勢いは衰えず、「中央切り込み隊」として東京へ進出していくのでした。

2014年10月、白鳥バレエ創立65周年記念公演として、創作バレエ「ヤマトタケル」(全3幕)を鹿児島市民文化ホールで再演しました。娘・白鳥五十鈴が主役を務めた公演で、その魅力を再確認いたしました。

戦いに明け暮れた戦士の虚しさと恋、それに翻弄^{ほんろう}される女性。人の儚さ^{はかな}を描いた大作です。ドラマ性あり、神話のロマンチズムあり。美しく編曲された音楽と情感を浮き立たせる照明で、公演を重ねるごとにますます豊かなものになりました。「ヤマトタケル」という作品は世に残すべき名作である、との評をあらためて頂きました。



※芸術祭での上演に向け上京する列車の中で、テープレコーダーで音を確認する筆者と母・有馬エミ(1969年)

日本の夜明けを語り継ぐためのこの大作は、母・有馬エミと感動の涙を流しながら親子で創り上げました。その初演は20周年を迎えた1969(昭和44)年のことでした。

鹿児島で育んだバレエで、自分たちの力で、どのくらい成熟した芸術作品が創り上げられるかを示したい、という意気込みで取り組みました。私は文化庁芸術祭への出品を申請したのです。大きな壁があるとは知らずに。

私たちに届いたのは、却下の知らせでした。地方から参加の例がない、というのが理由でした。それもそのはず、地方からは初の参加表明だったのです。また、専門家中の専門家でなければ参加できない日本の芸術の頂点を競う場であり、まだ白鳥バレエの公演を見たことがない、というのも理由でした。

これにはとても悔しい思いをしました。皆必死で夢の実現に突き進んでいました。団員たちがバレエの訓練に従事できるよう、菓子工場を起業してアルバイトの場をつくったり、地方公演をしたりしてきました。私と母は、恐るべき行動に出たのです。

文化庁へ乗り込んで行きました。「これは東京の芸術祭ですか?日本の芸術祭ではないのですか?」と異義を申し立てました。結果、再審査。素晴らしい懐の深い芸術課長さんでいらっしゃいました。却下の決定を覆してくださったのです。「この知らせは直接、白鳥さんにお伝えしたい」と鹿屋の合宿所までお電話をくださいました。その知らせを聞いたときの喜びは、今でも忘れません。それからは一層、一丸となる私たちでした。



※鹿屋市の中央公民館で合宿し練習する白鳥バレエの団員(1969年)

全てが評価されると思いました。作品はもちろん、ダンサーの質や、動員へかける意気込みも。関東地区を中心に鹿児島、宮崎両県に縁のある人たちでつくる三州倶楽部へ出かけて行って話を聞いてもらったり、企業、自治省、警察庁、マスコミを訪問したり。一日で何ヶ所回ったことか。電車の中も座らずに走り(笑)、要人とのアポイントに間に合うよう駆け回りました。こうした苦勞を経て、芸術祭での披露に至ったのです。

創作バレエ「ヤマトタケル」は1969(昭和44)年11月7日、文化庁芸術祭作品として東京厚生年金会館大ホールで上演されました。

私が当初、どのような思いだったか。鹿児島は外来、県外のものを^{ひいき}最真にする、良く言えば謙虚、悪く言えば卑下する気風に、悔しい思いをいたしました。私たちは本質を見てほしいという思いと、日本の神話だって鹿児島から始まっているじゃないか!という思いとで、郷土を誇れるものが創りたかったのです。



※ヤマトタケル第2幕で、バ・ド・ドウ(2人の踊り)を披露するクサヒメ役の筆者

この作品は、薩摩鶏が日本の夜明けを告げる、斬新な幕開けとなりました。

皇子ヤマトタケルと南九州の勇者クマソタケル。その2人の間で揺れ動く、村長の娘クサヒメ。戦いに明け暮れるヤマトタケルの虚しさや人間像、土着の人々の生き生きとした情景。恋の要素が詰め込まれ、ドラマを盛り上げます。

初めての三幕もの。しかも日本の神話を基にした他にお手本のない作品で、芸術祭参加作品でもありました。私は振り付けに集中するため、部屋にこもりました。時計もない、テレビもない所で、テープレコーダーと共に過ごし、疲れ果てては眠りました。まず初めの1週間、ただ音楽を聴き、想像し続けました。

産みの苦しみでした。クマソの野性的な踊りのイメージが湧き始めました。そこからは次々と浮かんできました。あの苦労は、その後も大きな自信となった気がします。

芸術祭を前に訓練の日々が続いたのは当然のこと。オーケストラの音合わせの数日を終え、上演前日、2400席の会場へ到着した時、私は皆を裏玄関から入館させたのです。なぜかと申しますと、団員がホールの豪華さにおじけづくといけないと思ったからです。

野性味あふれるクマソタケルを小林恭氏が、凛々しいヤマトタケルを私の弟・有馬秀人が演じました。全く違ったタイプの2人の英雄が対峙する姿もバレエならではの舞踊表現であり、素敵に創り上げることができました。

私はクサヒメを踊りました。素朴な娘から恋する乙女となり、引き裂かれ運命にもあそばされ、強く^{はか}儂くこわれていく様子は、役者^{みょうり}冥利、いえバレリーナ冥利につきる役といえます。私は情熱的なクサヒメだったと思います。

小林氏は東京バレエ団創立メンバーでプリンシパル。後世に残すべき日本のオリジナル作品や、深い解釈のグランドバレエ改訂公演を盛んに上演した、伝説のダンサーです。クマソが乗り移ったように、迫真の演技をしてくださいました。

弟の有馬秀人は文学座を経て、共に舞台を踏みました。その下の弟の賢太郎は芸名・大山順二としてクマソの兵士役で舞台に上がりました。全員伸び伸びと、自分の小屋のように堂々と踊りました。

圧倒された審査員は「鹿児島は踊り好きな県なのですか?」と発言されたほどでした。ありがたいことに、新参者の私たちは大きな拍手で称賛されたのです。ホールには東京在住の鹿児島出身者がたくさん集まってくださり、「ブラボー」ではなく「よかどー」の声が掛かりました。

このようにして歴史を刻むことのできた「ヤマトタケル」は、惜しくも芸術祭賞は逃しました。ですが、創作にまつわるあらゆる苦労を喜びへと変え、精進するきっかけとなりました。

これをバネにますます必死の努力をしました。鍛錬を惜しまない日々が続く、「耶馬台」「平家物語」を創る意欲へつながつたとも申し上げられるでしょう。私が29歳の時の話です。

1969 (昭和 44) 年の文化庁芸術祭への参加作品「ヤマトタケル」は、東京のバレエ界はもとより多くの観客が惜しめない拍手を送る、超満員の盛況でした。無名の地方バレエ団にとっては、歴史的な公演となりました。

本格的オリジナルの作曲を依頼し、総員 40 余人が制作から作曲、振り付け、演出まで。観客動員に力を注いだのはもちろん、鹿児島からオリジナルの創作バレエをひっさげての東京公演という意欲からでありました。

この公演はテレビ東京 (東京 12 チャンネル) が興味を示してくださり、ドキュメンタリー「青春」の制作となりました。発端から日々の練習、晴れの舞台までを放映しました。また、公演取材した鹿児島新報の記者が 75 年、私のバレエ活動を紹介する記事の中で、こう書いてくださいました。

「真紅の^{どんちよう}緞帳が静かに重く、舞台と観客席をさえぎるように降りた。徐々に明るくなった場内に、しばらく水を打ったような静けさが漂った。しかしそれもわずかの時間。どよめきが



※ヤマトタケルを披露した九州巡回公演で、浜辺の娘たちを演じる白鳥バレエ団員ら (1970 年 5 月)

どとう怒涛のような拍手に。これまでの常識を破る純日本の古典バレエのすばらしさに期せずして送られる拍手であった」

当時、中央斬り込み隊という意気込みで東京公演を果たしたのです。芸術祭参加は、上演後の活動に大きな転機となりました。

まず財団法人民主音楽協会 (民音) 主催の「九州巡回公演」(70 年 5 月 21~27 日、福岡県飯塚市、長崎市など 7 カ所)や、財団法人九州沖縄文化協会と琉球政府共催の「第 3 回九州沖縄芸術祭」(71 年 8 月 8、9 日、沖縄県那覇市)などで上演を重ねました。

民音は、世界的なバレエ団やオーケストラを呼んだり、世界指揮者コンクールを開催したりしていました。そこからオファーを受けるということは、クラシックの世界で誇りでした。国内のバレエ団で上演していたのは東京バレエ団、松山バレエ団のほかは、白鳥バレエ団だけでした。

沖縄公演の後日談ですが、現在沖縄で活躍される先生方から「ヤマトタケルを見てバレエを始めたんです!」という、うれしい話を聞きました。復帰前だった当時の沖縄は国外。皆パスポートを持ち入国した芸術祭でした。

ヤマトタケルは各地で喜ばれ、毎年巡演することになりました。「ジゼル全幕」や「ロシア民族舞踊集」「オーケストラと一緒に」など、これらはバレエ団として力をつける大きなキャリアとなり海外公演へとつながりました。私の 31 歳は舞台、舞台の日々でした。



※クサヒメを演じる白鳥見なみと村長役の有馬秀人 (1970 年 5 月)

1969 (昭和 44) 年に文化庁芸術祭に初参加した後、結婚もしました。夫は、東京のシステムエンジニアで、鹿児島出身の野村良忠です。その後、九州巡回公演 (財団法人民主音楽協会主催) を皮切りに各地で公演を続け、1972 年に待望の娘 (五十鈴) を出産。普通であれば少し休むべきところでしたが、芸術祭への 2 回目の参加となる創作バレエ「耶馬台」に取りかかりました。

というのも、文化庁から毎年、参加を促されていたのです。毎年制作費が足りず困難なので、4 年に 1 回を目標にしました。異色のバレエ団として注目していただけたことは、とてもうれしいことです。鹿児島から日本人の心の表現を広く発信したいという思いで突き進んできた者としては、とてもありがたいことでした。



※文化庁芸術祭に参加した創作バレエ「耶馬台」で卑弥呼を演じる筆者

資金面では四苦八苦の連続でした。公演は満席でも、芸術祭初参加から数年間で、3 千万円以上の赤字を出しました。当時、学校の校舎を建設できるぐらいの金額でした。もちろんお金をかけなくても公演はできます。でも、粗末な舞台で観客を欺いてはならない。

「お金がかかっても、自分で納得したバレエであれば、その損失は豊かになった観客の心が補ってくれる」。私たちはそう思っていました。

耶馬台の時代は 2 世紀後半から 3 世紀にかけて。ですが、人間の心は現代とそう違うはずがありません。その時代を模索しながら現代のバレエに移し変える。原点に戻ったバレエこそ本当の輝きを放つ。今でもその思いは創作の核となっています。耶馬台で 73 年の芸術祭に参加したほか、大阪公演もしました。

翌 1974 年、鹿児島県バレエ協会が設立しました。私は会長に就任し、「青少年のための芸術鑑賞事業」で県内 20 カ所を回りました。その頃、どの県にもまだ、そのような文化事業はありませんでした。鹿児島の文化行政が進んでいたということであり、とても誇らしいことです。巡回公演では、バレエ初体験の学校の生徒や地域の皆さまの感動に輝いた顔が、私たちのエネルギーへと変わりました。

たくさんの実験的な活動も、私たちの力となりました。振り返ってみると、夢のような企画に感じるのでお伝えします。鹿児島市の鴨池動物園で夜、白鳥バレエ団を率いて野外公演したのです。

9 月の十五夜に、動物園を京の都 (五条河原) に置き換え、初秋の幻想「源平盛衰記」を演じました。ダンサーは月見草の精や源氏の兵士、常盤御前、牛若丸 (義経)、弁慶などに扮し、さあ開演！ スポットライトが漏々と照らすと、戦場へ駆けつけた 3 頭の馬が驚いて前脚を上げていななき、それが迫力の演出となりました。市民の皆さまも、またとない幻想の世界を楽しんでくださったようでした。

今となっては、とても斬新と思える試みにも挑戦しました。南日本放送 (MBC) が 16 年に文化庁芸術祭へ出品したバレエドラマ「墓標の賦」の制作に参加したのです。農村の日常生活のシリアスなドラマをバレエで創作したのです。現代、バラエティーでバレエの異質さがおもしろく描かれ、親しみを持たれるようになったことは喜ばしいことですが、変わり続ける時代の流れの中にも不変の源流はあると信じ、精進していきたいと思っています。



※「耶馬台」でマワカ役の小林恭と踊る筆者 (1973 年 東京)

娘・五十鈴3歳の時、1975(昭和50)年、私はフランスに飛びました。20世紀最高の振付師モーリス・ベジャールに会いたかったのです。

出会えたのはまさに導きとしか例えようのないタイミングでした。フランスに8年居る日本人ダンサーが一度も会えなかったのに、すぐに会うことができました。ベジャールは全盛期、世界を飛び回っていました。こんな幸運があるでしょうか。私は、あの「ボレロ」の出来上がっていくさまを目の当たりにしたのです。



※「ジゼル」を踊る筆者とミッシェル・ブルエル
(1979年 鹿児島市の県文化センター)

ボレロと言えば、ジョルジュ・ドンですが、最初にボレロを踊ったのは、なんとソ連からベジャールの元に来たマイヤ・プリセツカヤだったのです。「愛と哀しみのボレロ」でドンがスターになる15年も前のことです。ベジャールはドンに「我々のファウスト」という大作を与えました。ドンを鍛え、自らも踊り、新作に打ち込むベジャールの姿は刺激的でした。

「奇抜さ」から「美」に移る絶妙さに、いつも魅了されました。私は強く思いました。「私の好きにやっつけていいんだ」。自分の発想で世界を魅了するベジャールを見て、日本のバレエを作り続けようと思ったのです。

フランスのほか、ソ連、ベルギーで学びました。ソ連ではクラシックの殿堂、中枢に触れることができました。ソ連の最高指導者であるセルゲイエフ、ドジンスカヤ夫妻と出会えたのです。これもまた数奇なことで、かのバリシニコフとマカロワの亡命により、両夫妻がワガノワバレエ学校へ左遷*になったからでした。ちなみに、現在でも、両夫妻の弟子たちが毎年鹿児島を訪れ、交流が続いております。

*国立バレエ団から、バレエ学校の校長に降格ということ。
ワガノワバレエ学校は、現在も最高峰のバレエ学校。

さて、16年、フランスの第一舞踊手で金冠受賞者であるミッシェル・ブルエルを招聘しました。本場の「ジゼル」がやりたかったのです。彼の腰は高く、体の3分の2が足というくらいでした。世界レベルと一緒にステップを踏み、並んで跳ぶとなると、余計に高く跳躍しなければなりません。県知事主催の歓迎パーティーで、私はこう挨拶しました。「世界一長い足と、世界一短い足が踊ります」。すると「薩摩おごじよ、頑張れ」との声援をいただきました。

私はミッシェルから、ノーブル(貴賓)についても教えられました。役柄と同じく貴族の出である彼は、^{なだ}佇んでいるだけで貴族そのものでした。ジゼルの死のシーンでも、取り乱すような感情過多な演技にせず、少しの表情の変化で悲しさがより深く表れました。

そんなミッシェルがたった一つ、とてもうれしいことを言いました。「今まで踊った中で、マダム白鳥が一番踊りやすい!」。彼は各国の名だたるプリマとしか踊っていないダンサーでした。この一言は大きな自信となりました。最近、ライバルについて聞かれたことがあるのですが、その時は不思議とピンときませんでした。



※モーリス・ベジャール(右)と筆者

1979年、ミッシェルが再来日し、白鳥バレエ創立30周年記念の「ジゼル」公演がありました。白鳥バレエ後援会も発足し、パーティーで鹿児島市長や県議などを務めた平瀬實武氏がおっしゃいました。

「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、世界は変わっていただろうと言われます。白鳥の脚があと10センチ長かったら、世界のバレエは変わっていたことでしょう」。もったいないお言葉でした。鹿児島を拠点に選んだ私は、団を育て、作品を創作し、他に並びないものとなる。その志を立てたのです。ライバルは?と聞かれたら、おこがましくも「10センチ」と答えさせていただきます。

私はあの喝采を忘れることができません。言葉の通じない観客 5500 人の熱を一身に浴び、大変なプレッシャーから解放された瞬間です。各国の芸術ジャンルの招待団体、フランス、イギリスの劇団、韓国国立舞踊団、ウィーン少年合唱団、そして、日本の白鳥バレエ…。日本の代表として恥ずかしくない舞台にしたかったのです。

1980(昭和 55)年 12 月 17 日、シンガポール芸術節は白鳥バレエ団の公演で幕を閉じました。舞台裏は大きな興奮が渦巻いていました。詰めかけた外国人たちの大きな輪の中に、白いチュチュ(衣装)の鹿兒島のバレリーナたちがもみくちゃになりながら、祝福を受けていました。世界の名作といわれる「白鳥の湖」を踊り終え、顔も体も玉の汗で光り、目は感動の涙で濡れていました。



※「古代への追想」の一場面(1980年12月17日 シンガポールのナショナルシアター)



※シンガポール政府から贈られた記念旗

一方、県や後援会の手で「団の負担を少しでも軽く」と、物心両面の援助が始まりました。多くの激励の中、一行が鹿兒島空港を飛び立ったのは 12 月 12 日でした。

到着 2 日目、早くも公演準備と並行して文化交流が始まりました。国内で最も優れたバレエ団シンガポールアカデミーでの特別講師として、レッスンをしたのです。英国ロイヤルバレエ仕込みのシンガポールは想像していたよりレベルが高く、ロシアンバレエの流れをくむ私のレッスンは大変興味を持たれました。時間さえ許されれば追加レッスンもするところでしたが、公演前の慌ただしい身ゆえ、残念ながらお断りしなければなりませんでした。

また、大学の舞踊研究会メンバーたちとのディスカッションに招かれ「日本のバレエ」「鹿兒島のバレエ」について講演しました。

公演の申し入れがあったのは 5 月初旬。創立 30 周年来、海外との交流を積極的に進めていた白鳥バレエ団にとっては、またとない機会でしたが、いろいろ検討した結果、招待受け入れを断念しました。鎌田要人・鹿兒島県知事宛てに再度、招待の申し込みがあったのは、そのひと月後でした。

招待状によると、クラシック・バレエの中でも、日本ならではのテーマで創作する私たちの舞台を見たい、という主催者側の熱望の前に、困難な条件でも招待を受け入れざるを得なくなりました。A プログラムに創作バレエ「古代への追想」(全 3 幕)、B プログラムに古典バレエの代表作「白鳥の湖」(第 2 幕)と日本の四季を表現した「日本の郷愁」。メンバーもベストな 50 人を編成し、猛レッスンが始まりました。

公演で一番不安だったのは、観客の反応でしたが、新聞 5 社の 30 回以上の報道のおかげもあり、2 公演で 5500 人を動員(主催者発表)しました。A プロ、B プロとも大きなアンコールにとどまらず、終演後には舞踊関係者や初めて顔を合わす人たちが多数、舞台裏へ祝福に押しかけました。

シンガポール側の日本、そして鹿兒島との文化交流に対する期待は大きかったです。芸術節に参加した大半が国立の団体だったにもかかわらず、鹿兒島のバレエ団を閉幕行事の催しにしたこと、そして翌年 4 月シンガポールの日本文化使節団が新たに鹿兒島の視察をスケジュールに組んだことでも理解できます。

1981 年の白鳥バレエは 2 本の古典バレエ上演のため、休む間もなくレッスンに次ぐレッスンでした。シンガポール芸術節を視察したヨーロッパのある国からフェスティバルへの招待話も舞い込み、レッスンにも一段と熱のこもる日々でありました。

1980（昭和55）年12月のシンガポール公演を終えた私たちは、また舞台に明け暮れました。私のバレエ人生にとっては、今までなかった日本の創作バレエに取り組むことのほか、たくさんの古典に打ち込むことも大切でした。今も昔も、大人も子どもも心躍らせて鑑賞する「くるみ割り人形」や「眠れる森の美女」は、その中の重要な作品です。

私は団員たちと鹿児島島の津々浦々で上演しました。ポーランドの第1舞踊手ジスワス・スイオロー氏や、土田三郎氏（貝谷バレエ団プリンシパル）も招き、本公演や巡回公演を行ったのです。

私たちが地方公演を大切にするのは、戦後の文化芸術に飢えた時代を知っているからかもしれません。現代においても、生身の芸術であるバレエは人の心を潤すものであると申し上げたいです。

かつて校内暴力がマスコミを賑わしていた時代、弟（白鳥バレエ事務局長の故・有馬秀人）が同窓生から「息子が立ち直ったので、お前さんには足を向けられんごっ感謝しちょっと」と打ち明けられました。父に反抗していた少年が、学校でのバレエ鑑賞会で心に大きな変化があったのか、その後の態度が大きく変わったそうです。他の生徒たちにも影響を与えたのでしょう、校内暴力も収まったとの報告ももらいました。心根の純粋な若い芽を愛おしく感じる素晴らしい思い出です。

当時盛んに上演した作品「くるみ割り人形」は、全3幕の大掛かりな装置をすべて持っていく「引越公演」で行いました。1本の大作を丸ごと見ることができた子どもたちは興奮し、目を輝かせてサインをもらいに来たのを覚えております。チャイコフスキーの音楽は、踊り手の心も観客の心も高揚させ、バレエの玉手箱のようにファンタジックな世界へ誘います。1981年から9年間、毎年公演しました。

「レ・シルフィード」（ショピニアーナ）も大好きな古典の一つです。この作品は、初演当時で言うと、筋書きのない、革新的なものでありました。ショパンの美しい曲調を詩的に具現化した、この世のものとは思えない美の世界を生み出します。その一つ一つの動きの情感や全体の構成の麗しさは秀逸で時間を忘れさせ、白昼夢を恍惚と見ているようです。



※「くるみ割り人形」公演のアンコールに応える筆者と有馬秀人（1989年 奄美市の奄美振興会館ホール）

1983年、社団法人日本バレエ協会の九州南支部が設立され、私は支部長に就任いたしました。翌年には、熊本、大分、宮崎、鹿児島県の4県が集結し、日本バレエ協会の一大事業であった「全国合同バレエのタベ」にて「レ・シルフィード」を上演。私は大好きなフォーキン作品を指導するにあたり、南九州の若手たちの全てが全身全霊を踊りにそそぎ輝くよう、群舞の一人一人にまでプリマの雰囲気を与えました。

その丁寧な表現はとても好感のもてるものであったらしく、ビデオを欲しがる他の支部の先生方もいらっしやうと聞きます。今、その若手たちは、それぞれの県の重鎮となり、今もなお後進の指導に力を注いでいらっしやいます。



※「全国合同バレエのタベ」での「レ・シルフィード」公演（1984年 東京メルパルクホール）

1989年、私は大阪空港に降り立ちました。バレエ人生を注ぎ込める題材と向き合う旅でした。鞍馬、嵯峨野、大原…。目的地は詳しく決めず、歴史上の魅力的な人物たちに思いをめぐらしました。大好きな義経や祇王などが頭をよぎりました。なんとなく私が向かったのは、大原の寂光院でした。

運よく平清盛の長男・重盛の子孫であられる小松智光門主からお話を伺うことができました。小松門主は女性で初めて天台宗の最高位の大僧正になった方です。

寂光院は、清盛の娘・建礼門院が隠居した所です。壇ノ浦で入水を図ったものの助けられた後、念仏三昧で一生を過ごしたという、その部屋からの静かな花々の息吹と、小松門主の語る建礼門院の最期のイメージは、私を一瞬にして虜にしました。舞台のラストシーンはそのときもう出来上がったのです。愛する人々を全て失った戦乱の世を、白椿を眺めながら思いたたずむ尊い姿は、私に強いインスピレーションを与えました。

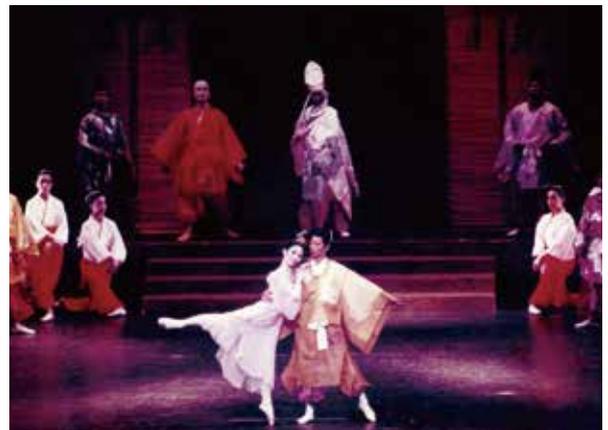
小松門主はこうおっしゃいました。「あなたさまが平家物語を創られるのであれば、悲しく暗いだけの平家物語ではなく、明るく仕上げてください。平家は一族みんな仲良く栄え、仲良く滅んだのです。同族で争うことのなかった一族です」

私はすぐに動き始めました。以前から親交のあった劇団文学座の杉村春子先生主演の「怪談牡丹灯笼」という作品で脚本家の大西信之氏を知り、台本を依頼することにしました。出来上がってきたのは清盛の愛妾「祇王の巻」と、清盛の娘「建礼門院徳子の巻」。二役を私が一人で演じ分けるといふ、女性が軸の作品で、清盛は専横ぶりが中心になっていました。

私は、清盛を軸にして平家一族を描きたかったのです。女性の心理に普遍性はあるかもしれませんが、平安時代が武士道と日本の雅情緒を描くには1番だと思っていた私は、もっと平家物語の底に流れているものを大事に描きたかったのです。

台本は、母エミがバレエ用に書き直したものを使用することになりました。作曲は、当時貝谷バレエ団に作品を提供していた小島佳男氏に依頼し、台本に合わせて情景を踊りながら説明し、構成していきました。

衣装デザインは和物を得意とする橋本直枝さん、製作は東宝衣装でした。橋本さんとは繰り返し、雅の十二単をどのように軽い素材で作る、踊りやすいようにするか、試行錯誤の上でデザインされました。美術は、13(昭和48)年の文化庁芸術祭参加作品「邪馬台」で、斬新な美術で話題になった有賀二郎氏に依頼しました。



※建礼門院徳子を演じる白鳥見なみと、高倉帝の有馬理

あとは私の振り付けです。ポワントを履いて踊る女性たちが繊細な日本女性の心理や慎ましさを踊る振り付けは、難しくそうですが、面白いものでした。制約が新しいものを生み出します。指揮は、当時目覚ましい活躍を見せていた末廣誠先生。出来上がった音楽はイメージにぴったりの感動的なもので、振り付けはすらすらと出来上がったのです。

まずは90(平成2)年1月の40周年地元公演、そして10月はいよいよ文化庁芸術祭の参加です。すべて寂光院で感じた「永遠の一瞬」から始まりました。初めて愛でる「散り椿」を眺めながら。



※「紅葉の宴」(1990年文化庁芸術祭「平家物語」第1幕)

3度目の文化庁芸術祭参加となる「平家物語」は、1990(平成2)年10月15日、東京メルパルクホールで上演いたしました。

演奏は東京フィルハーモニー交響団、指揮は末廣誠先生。鹿児島県人会の協力もあり満席でした。私は、興奮する弟やスタッフたちの気迫でほとんど眠れぬまま、踊りました。何かに踊らされているかのようで、白鳥見なみであったか、建礼門院がのりうつったか、言葉通り「無心」であったと記憶しています。

観客席からの拍手は静かに長く続きました。幕が下りる時、自然と合掌した私はうちふるえながら、涙がこみ上げてくるのを感じました。初めての感覚でした。



※文化庁芸術祭参加作品の「平家物語」より第3幕「海底浄土」の一場面(1990年10月15日、東京メルパルクホール)

「この『平家物語』をボリショイ・バレエ団が取り上げ、(野性味あふれる演技で一世を風靡した演技派の)タランダが平清盛の役を演じたら…、等と考えると楽しい。そんなことがあっても決しておかしくないと思わせるほどの出来映えなのだ」(山野博大氏)

「よく整理された流れ、団員たちの目いっぱいの演技が相乗的に作用して、本当によいものを見たという印象が残った。鹿児島から上京したというハンディを考えると、これだけの完成度のあるバレエを作ったということ自体が驚き」(同)

高柳氏は「週刊オン☆ステージ新聞」で、90年の「邦人舞踊公演ベスト3」にも挙げていただきました。ほかの方からは「日本の『白鳥の湖』ができましたね」という言葉もいただきました。日本を飛び出し世界の舞台へと飛躍させた高評価には、今なお興奮します。

鹿児島公演での初演の時から作品に没入した団員たち、支えてくれた家族。ゲストも含め、わが作品としてのプライドを持って駆け抜けてきた一体感に包まれました。あのような幸福な舞台を移動公演で実現できたことは、やはり今でもなお、稀なものだと思い起こします。

その年の芸術祭賞は松山バレエ団の「シンデレラ」となりましたが、批評家たちは私たちに称賛する記事を寄せてくださいました。僭越ながら、その一部を紹介させていただきます。

「再演、三演と重ねて鹿児島バレエの財産として残してほしい。外国のバレエ団から作品を貸してください、という動きでも出てくれればいいですね」(高柳守雄氏)

芸術祭賞は逃しましたが、バレエ界の権威ある橘秋子賞功労賞と、芸術文化振興基金(第1回)の助成が与えられました。これは、「平家物語」に対する最高の評価であると感じました。長年、地方からバレエの芸術作品を発表し続けてきたことがやっと認められたと、大層うれしいことでした。今まで応援を重ねてくださった方々への感謝と、「平家物語」という作品が生まれるまでの出会いや気づき、インスピレーション、苦勞の数々への愛しさを、ひしひしと感じました。

それから20年、再演を重ねました。民音例会での公演、鹿児島市民文化ホール自主文化事業としての舞台、私のファイナルステージとなった白鳥バレエ60周年記念公演などで、たくさんのお客さまに愛されました。

白鳥バレエは創立70周年を記念して「平家物語」を上演しました。また、かけがえのない「永遠の一瞬」を見ることができました。現代人に贈るものあわれ、日本の雅、バレエの美しさ…。どのように皆さまの心に届けられるのでしょうか。私どもの愛する一大叙事詩「平家物語」への新たな戦いと入魂の日々は続いています。

バレエの世界には、学び終わるということがありません。伝統的な芸術も常に新たな境地を目指し、変わり続けていきます。もっとエレガントに、もっと鋭く。技術も表現も洗練されてきます。

創立40周年を過ぎ、私たちは有意義な交流の機会を得ました。ロシアのバレエ団とのジョイント公演を1997年より約10年にわたり開催したのです。成熟したフォームとメソッドを十分に取り入れ、プロダンサーの日々の鍛練の厳しさを本場ロシアから学ぶことは、私たちの飛躍を意味していました。ロシアで活躍するプリマと同じ舞台上立つ子どもたちは、大きな刺激を受け、成長しました。

中でも「ロミオとジュリエット」は、白鳥バレエの貴重なレパートリーとなりました。娘の五十鈴は文学座で演劇を学び、役者としても活動していました。それまでもドラマチックな役柄でないと興味を示さないところがあったのですが、憧れの演目で、しかもジュリエット役。私はチャンスとばかりに背中を押したのです。

それは、彼女がポリショイへの短期留学でつかんだ好機であり、創立50周年にふさわしい格式ある作品でもあったからです。娘はあまりのプレッシャーに、はじめ尻込みをしました。でも私には自信がありました。ロシアの男性ダンサーはダイナミックで力強いパ・ド・ドゥ(2人の踊り)を見せてくれます。団にとって貴重な経験となり、また観客もバレエで見る「ロミオとジュリエット」がいかに素晴らしいかが分かります。

振付師エレナ・レレンコワの厳しい指導は、娘にはありがたい鞭となりました。五十鈴は、ポリショイ出身のロミオを相手役に、とても長い愛のパ・ド・ドゥや死に至るまでのジュリエットを輝きに満ちて演じ切り、意義深い公演となりました。

私は、子どもたちの心のバレエも大切にしたいので、2代目を継いだ16歳の発表会で、「親指姫」や、牛若丸をヒーローにした「初秋の幻想」を披露しました。子どもたちの情操教育と感性を培うため、世界の童話(アンデルセン、グリム、メーテルリンク、ペロー)や日本の昔話のほか、母の創作童話など26の作品をバレエ化しています。

1992年、わが鹿児島の誇る児童文学者・椋鳩十の児童文学賞の制定記念として、椋先生の「月夜とおしどり」を基にした「おしどり物語」を創作しました。その後も、椋先生の幼少期を描いたノスタルジックな作品「夕焼け色のさようなら」、戦争と動物愛を描いた「マヤの一生」を創りました。作曲は「平家物語」をお願いした故・小島佳男先生。とても贅沢なことです。大人も子どもも、日本人も日本人でなくても伝わる、椋作品の「温もり」を大切にしたいからです。かごしま児童文学フェスティバルで披露し、審査員の方々から、椋作品をバレエで見るとは思わなかったとお褒めをいただきました。「おしどり物語」は東京でも公演し異彩を放ち好評でした。



※ジュリエット役の白鳥五十鈴

1992年に南日本文化賞、2003年に地域文化功労者文部科学大臣表彰、2004年に鹿児島県民表彰を受けました。地域文化功労者表彰式では、最若年でありながら代表として壇上へ上がりました。ここまでの苦しみも多かった「永遠の一瞬」を美しいものに変える効力があり、今も励みになっています。



※白鳥バレエ創立50周年記念公演「ロミオとジュリエット」(2000年11月3日 鹿児島市民文化ホール)

バレエ鹿児島上陸から 70 年…。毎年のように日本人が世界有数のコンクールで受賞したニュースが流れます。海外バレエ団のトップで活躍する踊り手も増え、バレエの裾野は広がりました。

東京には世界中の有名ダンサーたちが来日し、芸術性の高い作品を上演します。心待ちにするファンも多いと言えます。一方、地方は過疎化が進み経済格差も広がっています。鹿児島を含めて地方で芸術活動を続けることは、困難な道を険しい方へ進んでいくことだと感じています。

2009 年、私たちは 60 周年記念公演を 2 日間、鹿児島市民文化ホールで上演することとなりました。演目は、日本の心を描いた「平家物語」。国の芸術祭に参加するには、作品、構成、音楽、ダンサー、舞台効果、演出の全てにおいて、完成度を極めなければなりません。磨かれた作品は、愛好家の方々だけでなく、バレエを知らない人にも訴える力を持つと、心から信じています。

「平家物語」は白鳥バレエにとって重要な作品であり、日本の美徳、情緒、雅が詰まっています。「日本の心と西洋の美」の融合を正しく表現できる作品です。個人の華やかなテクニックで会場は沸きますが、実はダンサーとは舞台芸術の 1 要素でしかありません。作品あってこそ踊り手なのです。1 曲のヴァリエーションにせよ、どんな心をどんなシーンで踊っているのか。全体の役作りの中でその役をきちんと表現できているのか。演じ手の醍醐味は、魅力的な役作りのため、作品の理解をいかに深められるかにあるのです。

私はラストステージをこの 60 周年公演にし、プリマを娘に譲りました。娘は“白鳥”を襲名し、白鳥五十鈴となりました。建礼門院徳子(平清盛の娘)役を壮年期を五十鈴が、晩年期を私が演じました。70 歳にして舞台演出家、踊り手として洗練を極めようと志し、見えた世界は大きいと感じました。

ダンサーは体で表現する全てに、心も、生き様も、日常も表れます。入水の景から海底浄土の景までは、美しく浮遊感のある数々のリフトを盛り込みました。サポートされる女性が美しく体を保つには技術が必要です。私が 40 年近く必死で研究し編み出し培ってきた「白鳥メソッド(方法)」を体現する貴重な舞台となりました。

私はパ・ド・ドゥ(2人の踊り)、中でも特にリフトには、少なからず自負がありました。男性パートナーの感想にも、そう思う裏付けがあったからです。しかし 10 年の年月を経た肉体は、弾けるような筋肉に覆われてはいませんでした。だからこそ私は「少ない力で大きなエネルギーを生む」メソッドを追究する必要があったのです。そのメソッドは、日本人の決して恵まれているとは言えない体を美しく整え、柔軟に使うコツと言えます。子どもたちから健康と美を心がけるシニア層まで、また運動能力向上を図るスポーツの方々まで、親しんでいただけるようになりました。

60 周年公演では「平家物語」の初演当時の味わいを出すため、振り付け補佐として土田三郎氏の力をいただきました。ご来場くださった皆さまに、日本人の心と生のバレエの味わいが「永遠の一瞬」として心に残るものであったら、これ以上の幸せはありません。私は娘や多くの弟子、スタッフたちと、終わらないカーテンコールに涙し、合掌したのです。



※70歳で第3幕入水のシーンを演じる白鳥見なみ
(2009年11月21日 鹿児島市民文化ホール)

15年前の白鳥バレエ60周年記念公演は、約2千席の会場を2日間埋め、「平家物語」を久々に鹿児島でよみがえらせました。

自然と走り続けてきた道でしたが、何を残し、何を学び、何ができたのか。自問自答し本音を吐露すると一つの本番へ向けて育てあげ、創りあげることへの執念と楽しさは、時を忘れさせてくれました。もっとも、燃え尽きるほどの本番を終えると、すぐ次への秒読みが始まるのです。それが舞台の怖さと幸せを知る、私たちの常なのです

毎年の定期発表会では、子ども向けの創作バレエのレパトリーを増やしながらか、休むことなく上演しました。何千人もの門下生を輝かせてきました。「人生の大切な経験や素養となった」と数十年ぶりに懐かしく訪れる生徒もいます。厳しく育てあげてきたのですが、「優しかった」「温かかった」「楽しかった」「先生が憧れであった」と美しい思い出にしてくれているようで、うれしい。



※白鳥バレエ60周年記念公演「平家物語」で、ファイナルステージを終えてあいさつする白鳥見なみ（2009年11月21日 鹿児島市民文化ホール）

新後援会も発足しました。世代代わりの政財界の方や、五十鈴の先輩方であり鹿児島を代表する有識者の方々から応援やご指導をいただくことは、大きなエネルギーとなり、不況にもめげず上演を重ねることができました。

2015年の国民文化祭では、若手のフレッシュな作品のほか、「ヤマトタケル」の一篇を上演でき、文化の成熟度を示すことができました。久々の県外公演となったのが、同じ年の高野山開創1200年記念「空海劇場」への出演でした。密教の宇宙観とバレエの平安絵巻を融合させた20分間の作品で、オペラの佐藤しのぶ氏異ジャンルの方々とはテーマを共有でき、刺激的でした。

2016年には五十鈴念願の「ジゼル」オーケストラ公演。五十鈴を授かったのは、私が「ジゼル」九州巡回公演をしているときでした。五十鈴は宿命のジゼルを全身全霊で踊りました。

近年もバレエファンを増やそうと、娘の白鳥五十鈴とともに多くの舞台に取り組みました。2012年には2本立て（ダブルビル）で、鹿児島初上演「ライモンダ」と、昔から親しまれている「ラ・シルフィード」を公演しました。バレエの美をドラマと幻想で対比させた試みで、五十鈴は2役を演じました。中東の民族的な踊りを主軸にした異国情緒あふれる「ライモンダ」は、豪華な婚礼のシーンで終幕となる名作です。和物（「平家物語」）の後はクラシカルな美を、と新レパトリーを存分に披露しました。

2014年には65周年記念公演「ヤマトタケル」をオーケストラで再演しました。作品の味わいをより一層深めることができ、「日本を題材にしたバレエとして名作は数えるほどだが、ベジャールやノイマイヤーだけでなく『ヤマトタケル』も再演を重ねてほしい作品である」と評価をいただきました。

2017年にはバレエに親んでもらう「楽しい劇場へようこそ」を上演。五十鈴は2017年度県芸術文化奨励賞に選ばれ、私が踊ってから40年ぶりに念願の「シェヘラザード」の制作に勢力的に取り組み、魅惑的に演じました。

私はやらなければならないことがたくさんあり、まだ老いることができません。私の、いまだに軽やかに動く体を励みとして、バレエを美と健康のためのライフワークとしている子どもから大人の方々も増えています。また、運動能力向上を図るスポーツの方々も数多く親しまれています。「白鳥メソッド」「白鳥バレエストレッチ」を基に成長し続ける白鳥バレエを、皆さまがこれからも楽しみにしてくださることを心から願ひ、筆を置くことにいたします。

平成の最後に、世界遺産が焼け落ちた。人の美徳や慈愛を投影し、祈りや夢が建築として具現化したパリのノートルダム大聖堂。喪失感を共にした全世界が再建へ向け力を合わせることに、深い感銘を受ける。人間は捨てたものではない。言葉無くして説得力を持つものが「美」である。美を守りたいという情熱を人が持つことに、幸福を感じる。

それに比べまだまだ小さな歴史ではあるが、鹿児島で育った白鳥バレエは創立 70 周年を迎えた。2 代目・白鳥見なみは死にもの狂いで歴史を築いてきた。地方都市で心意気を貫くのは並大抵のことではなかった。3 代目を継いで数年たった今でも、責任の重さを感じている。

「作品」を創る。一言で言うとながら、2 代目は「グランドバレエ」（幕物の大作）を創ってきた。創り上げる過程にレシピはなく、誰も教えてくれない。そもそもどれだけの時間と人手、お金を使うのか。なかなか想像してもらえないと思うが、1 分の踊りを創るにも、何回となく音楽を感じ、出てきたものをそぎ落とし、振り付けを創っていく。「音」「動き」「照明」「美術」が一つの世界観のもとで調和するために、何人ものスペシャリストの労力と感性が要る。



※創立 65 周年記念「ヤマトタケル」でサヒメを情感豊かに演じる白鳥五十鈴（2014 年 11 月 30 日 鹿児島市民文化ホール）

音楽は、テーマを濃く描き出さなければならない。作曲家に、踊りとしてどのように表現したいのかを伝え、刺激し合いながら作っていく。衣装も、優美であり、踊りを妨げず、しかも体の動きを美しく見せるものでなければならない。既存の芸術を踏襲するだけではできない。作品の基礎となる部分を構築できたら、あとはスペシャリストに祈りを込めて託すしかない。まだある。踊り手を鍛え上げるには何年もの歳月がかかる。ヨーロッパの文化であるバレエに日本人の感性を盛り込むのも、大変なことである。

「ヤマトタケル」「邪馬台」「平家物語」…。この鹿児島に完成された遺産があるというのに、いったいどれくらいの人が「生」で鑑賞して下さったのだろうか。バレエにお金を使わなくても、とくに気にもとめない人がほとんどかもしれない。私は負け惜しみをせず、人の心に届くよう努力を続けなければならないのだと、自分に言い聞かせる。一目見たら分かってもらえるのだから…。

私は今もハングリーである。あらゆるものが既にあるからこそその渇き。これは開拓とは違う、私たちの世代共通のものかもしれない。感動的な「永遠の一瞬」を多くの人に届けたい。一夜にしてかき消えてしまうが、心に焼き付く舞台を見てほしいと願う。私たちのバレエが、文化や教育の軸となる魂をつくると信じるから。2 代目の洗練を目指した姿やスピリットこそ、継承するべきものだと思うから。何より舞台上演が私たちの本分であるのだから。

白鳥 五十鈴

- ・白鳥バレエ 団長・プリマバレリーナ
- ・(公社)日本バレエ協会九州南支部 運営委員
- ・鹿児島県バレエ協会 プリマバレリーナ
- ・鹿児島市芸術文化協会 理事

【受賞歴】

2008年 かざん文化財団賞
2017年 鹿児島県芸術文化奨励賞

【経歴】

白鳥見なみに4歳から師事。
ポリショイバレエマスタークラス修了。
60周年記念公演「平家物語」にて白鳥を襲名し、地域文化振興のためのアウトリーチ公演や後進の育成をする傍ら、大作のプロデュース、振付、主演にも携わる。
ロシアとのジョイントコンサート主演や、城山ホテル鹿児島でのバレエとしては初のディナーショー、高野山開創1200年記念の「空海劇場」など、多彩なパフォーマンスのチャンスを得、今年度も創立75周年公演に向け新作を創作中。文学座演劇研究所を経て役者としての舞台、テレビ、映画での経験を活かし意欲的に舞台を創造している。



海の向こうから、大谷翔平選手の活躍が聞こえてくる。

メジャーリーグでも二刀流を貫き、昨年は本塁打王やシーズンMVPを獲得し、打者に専念する今年も快音を響かせている。

大谷選手の前にも偉大な日本人選手がいた。イチローである。メジャーでもヒットを量産していた頃、白鳥見なみさんは「イチローに会いたい」とよく言っていた。大ファンではあるが、それだけが理由ではない。

「白鳥メソッドを伝えたいの。まだまだ現役を続けられるから」

白鳥メソッドは、見なみさんがバレエ人生で培った経験を基に、理想的な身体作りの研究を重ねて完成させたストレッチのことだ。イチローの体が、よりしなやかになると言う。バッティングフォームを毎年変えて模索を続けるイチローに、何らかのヒントを与えることができるのでは、と思ったものだ。

その願いは叶わず、イチローはその後引退した。メジャーでは小柄ながらも、数々の記録を打ち立てた「小さな巨人」であった。

この言葉はそのまま、全国に誇れる白鳥バレエの実績を積み重ねてきた見なみさんにも当てはまる。白鳥バレエ70周年を前にその半生を振り返ってもらおうと、南日本新聞の連載を持ちかけたのは、私が文化部長を務めていた2017年の暮れだった。

タイトルはすぐに決まった。「永遠の一瞬」。小さな巨人のように、相反する意味を持つ単語の連なり。一夜限りの舞台は、見る者の心に刻まれることで永遠になる。バレエそのものの本質を表していた。

一人語りで綴られた約1400字の連載は、翌年1月から毎月1回、計15回に及んだ。毎回、貴重な写真も掲載した。高校1年生でバレエ団主宰となったときのことを、こう書いている。

「夢中で、考える余裕もなく、ひたすらバレエと学業の毎日。汽車の中、電車の中でずっと勉強し、到着すると稽古。それでもちっとも苦しくはなく、楽しかった。夢と責任で燃えていました」

セーラー服の少女が、バレエはまだ洋舞の一つとしか見られていなかった時代に、しかも地方都市の鹿児島で、いきなり多くの門下生を抱えた。死にもの狂いの努力があったことだろう。

列車で24時間かけて東京に通った。日本古来の物語をテーマにしたオリジナルのグランドバレエを次々と創り続けた。「ヤマトタケル」「邪馬台」「平家物語」、いずれも高い評価を受けた。国内だけでなく海外でも公演を重ねた。試練や転機が何度訪れても、いつも熱意に満ちていた。

見なみさんの来し方を語った連載は、鹿児島のバレエ史でもあった。「本にしましょう」と何度か提案したことがあった。今回、白鳥バレエ75周年を記念して、後援会報特別号として一冊にまとめられることをうれしく思う。貴重な冊子として読み継がれていくだろう。

最終回に、こうある。

「私はやらなければならないことがたくさんあり、まだ老いることができません」

白鳥メソッドでいつも背筋をピンと伸ばし、もっともっと成長したいと願う見なみさんが見守るなか、後を継いだ五十鈴さんのもとの、白鳥バレエはいつまでも羽ばたき続けることだろう。ステージの一瞬一瞬を、永遠の記憶へと変えながら。

元 南日本新聞社文化部長 原田茂樹



Memorial Scene

全身全霊









頂いたお言葉より



川越 政則さま

(1916~1998)

元南日本新聞社社長



●「ヤマトタケル」クサヒメ：白鳥見なみ

恐れを知らぬ発光体

舞台上、絢爛と咲く、ボディーランゲージの花、あの「白鳥みなみ」の本名を知っている人が何人いるだろうか。彼女は「有馬美代子」という戸籍名とは全く違った人格に脱皮してしまった。クラシックバレエで独立したのが鶴丸高校一年生、それから、戦災に荒廃した日本の辺地鹿児島に、舞踊と音楽と美術とからなる総合的な舞台芸術の燈台を築こうと捨身になったのだからバレエの化身になってしまったのである。

イタリアの王侯貴族のあいだに流行した祝宴の余興がバレエのはじまりだった。それが、フランス宮廷にうつされ、ロシアに移植されるとチャイコフスキー作曲の「眠れる森の美女」・「白鳥の湖」などの傑作が生まれたが、とにかく、バレエは、宮廷とか皇室とか王宮を背景に育った総合芸術なのである。わが国には大正時代、帝国劇場歌劇部に移植されたが一般的になったのは昭和 21 年からあとだ。こういう壮大な芸術に、鹿児島の少女が立ち向かって四十年、廃寺跡・兵舎跡を転々と、血みどろに門下生を育て、前人未踏のクラシックバレエの土壌を拓き耕し、種子を播き続け、対外的に公演活動ができるようになると、県下巡回公演から文化庁主催芸術祭への参加公演、シンガポール芸術祭閉幕公演へと、日本の中央はもちろん海外にまでその実力を発揮するようになった。

世界の一流の舞踊手を招いての三カ国合作公演、ヨーロッパ、モスクワ留学、実弟有馬秀人のヨーロッパ、ソ連留学。その世界的な行動力、その試練に立ち向かう不退転の情熱は驚異に値する。

鹿児島県内の巡回公演も毎年のように十会場・二十会場と続し、彼女らの文化活動は、しっかり郷土の大地に根をおろしている。それに、「ヤマトタケル」とか「邪馬台」あるいは、今度の「平家物語」のように、ヨーロッパのバレエを越えようとする創作活動、すさまじいというほかはない。これらは日本文化史上にも遺る業績といってよい。

背水の陣というか、死中に活を求めるような肅々と前進してやまぬ生き方が、あの清楚なか細い体からどうして 40 年も湧きでてくるのだろうか。お母さんゆずりの才能なのかも知れないが、彼女は恐れを知らない発光体だ。遠きは花の香、近きは汗の匂いという。

白鳥みなみの存在の大きさ、真価はこれから認められてくる。孤独はすぐれた精神の持ち主の運命だ。暗夜があろうとも、ただ、己れの一灯を頼みに、日本バレエの創造という偉業に挑戦しつづけてもらいたい。



●文化庁芸術祭参加作品「平家物語」全三幕

バレエ界に不滅の「平家物語」

文化庁主催の平成2年の芸術祭で白鳥バレエ団が発表した「平家物語」について東京の評論家は「ポリショイ・バレエ団がやってもいいような素晴らしい内容だ」と激賞した。白鳥さんの40余年にわたるクラシックバレエへの捨て身の精進に対しては、全日本舞踊功績賞、県芸術文化奨励賞、MBC賞について日本の最高水準といわれる橘秋子功労賞が授与された。

わが国のクラシックバレエの歴史的な資産ともなった「平家物語」を見たバレエ評論家の山野博大氏が「これから、いっそう磨きをかけてしっかりとレパートリーに定着させ各地で再演、三演してくれることを期待したい」といていたが、今度財団法人民主音楽協会（MIN-ON）などの主催でまずそれが実現されたことは、鹿児島県の文化水準がはっきりと高まってきたことを示している。

「平家物語」は中央集権的な日本のバレエ界で地方の鹿児島が生んだ本格的なクラシックバレエだといわれるが、その不滅の真価は、西洋の真似事ではなく日本独特の風土や人情を内容とした出し物を創作することにある。

昭和44年の芸術祭参加の「ヤマトタケル」から「耶馬台」についての「平家物語」がそれだ。その点について、日本バレエ協会の島田廣会長も「白鳥さんの場合その芸術的な指標は西欧のダンス、クラシックの技法を踏まえて日本の新しい民族的な創作バレエに創造に情熱を傾注しておられること」だと指摘している。

西洋文化を消化し、それを超え、日本的な新しい文化を創造されつつある白鳥さんの壮烈なまでの芸術活動は前人未だのものといえる。われわれはあの絢爛豪華な「平家物語」の舞台の裏に白鳥さんたちの凄惨なまでの心血が注がれていることを理解してあげたい。



●平家物語」紅葉の宴より 建礼門院：白鳥見なみ 高倉帝：有馬理

頂いたお言葉より

高柳 守雄さま

バレエコラムニスト



●「くるみ割り人形」1幕 クララ：白鳥見なみ 王子：土田三郎

地域密着で秀作育つ

毎日新聞の元学芸記者で、バレエやオペラなど舞台芸術のコラムニストとして知られる高柳守雄さん（東京在住）がこのほど、来鹿した。高柳さんは現在、季刊誌「バレエの本」（音楽の友社）で全国のユニークなバレエ団を紹介している。その取材のため鹿児島市の白鳥バレエ団を訪ねた。

昨秋、芸術祭に参加した同バレエ団の創作バレエ「平家物語」を、1991年の作品のベスト3に挙げている。「日本のバレエは西洋に劣らない水準までできています。そろそろ日本独特の風土や人情を伝える出し物が出てこないといけない。『白鳥の湖』を繰り返してやってもつまらないでしょう。そういう考えから芸術祭で唯一、日本の作品を発表した白鳥バレエは評価できると思いました」「しかし、今のような中央集権的な芸術祭は無意味です。国が金を出してやる祭りなら、もっと地方の団体に援助して全国から参加できるようにしないと。地方でもいいものをつくっている。東京とのレベルの差はさほど感じられませんね」

白鳥バレエを取材して、鹿児島県の文化行政は評価できる、と思ったという。「例えば、鹿児島は毎年地方の巡回公演をしているでしょう。地域に密着した活動の中からはいい作品が生まれるんだと思います。

おまけにオペラ協会や交響楽団もあり、東京からスタッフを呼んでレベルの高い公演をしている。これほど盛んに活動している所は、全国でもそう見られません」「『平家物語』は西洋バレエの技術を土台に日本的な優雅さを持った完成度の高い作品。日本の題材と意識しなくても面白い。創作への意欲が感じられま__した。願わくば、やって終一わりではなく、再演、三演と重ねて鹿児島バレエの財産として残してほしい。外国のバレエ団から作品を貸してください、という動きでも出てくれればいいですね」

●「邪馬台」カーテンコール 卑弥呼：白鳥見なみ マワカ：小林恭





Minami
Shiratori

白鳥見なみ

●白鳥見なみと母・有馬エミ

Profile

鹿児島のクラシックバレエの草分けである白鳥バレエ主宰。1969年、文化庁芸術祭に地方から初めての参加を果たす。1973年再び芸術祭に参加。NHKバレエの夕べ、日本バレエ協会フェスティバル等にソリストとして出演。中央バレエ界でも活躍している。

文化庁芸術祭参加以来、国内外で活躍、文化庁芸術祭参加作品「ヤマトタケル」「邪馬台」「平家物語」他多くの創作バレエを制作。九州バレエ界のリーダー的存在である。1990年日本の「白鳥の湖」と評された「平家物語」で3回目の文化庁芸術祭参加。シンガポール芸術節の招聘公演や、ロシアとのジョイントコンサートなど、海外との文化交流においても本拠地鹿児島より広く発信している。また「青少年のための芸術鑑賞事業」など、地方文化振興のための活動も、50年にわたり先駆的に取り組み活動している。鹿児島県バレエ協会会長。日本バレエ協会九州南支部初代支部長を、1984年から2004年まで務める。2009年60周年記念公演「平家物語」をファイナルステージとして舞台を降りたが、地方文化振興と、3歳から70代まで幅広い世代にわたる指導育成に、更なる意欲を燃やしている。

鹿児島の女性を美しくしたいと言う願いで、自身のバレエ人生70年で培った経験を基に、理想的な身体作りの研究を重ねて完成した今の“白鳥メソッド”（白鳥バレエストレッチ）細いしなやかな動きやすい美しい身体になると評判である白鳥メソッドを指導している。

近年は、2012年白鳥バレエ DOUBLE BILL 公演、2014年白鳥バレエ創立65周年記念「ヤマトタケル」全幕、2015年高野山開創1200年「空海劇場」、2016年白鳥バレエ公演「ジゼル」全幕、2017年白鳥バレエ公演「楽しい劇場へようこそ!」、2019年白鳥バレエ創立70周年記念「平家物語」全三幕オーケストラ公演等々芸術監督として活動している。中でも2014年65周年記念公演「ヤマトタケル」は、日本のバレエとして今世紀最高の振付家モーリス・ベジャールの「ザ・カブキ」、イリ・キリアン「輝夜姫」と並んでもいいオリジナル大作であるという高い評価を得た。

【受賞歴】

1976年全日本舞踊功績賞、1977年第1回鹿児島県芸術文化奨励賞、1989年MBC賞、1991年橘秋子賞功労賞、1992年南日本文化賞、2003年地域文化功労者文部科学大臣表彰、2004年鹿児島県民表彰、2008年日本バレエ協会舞踊文化功労賞、2018年日本バレエ協会第1回指導者特別賞



白鳥見なみ中学1年



橘秋子賞受賞 牧阿佐美女史、三谷恭三氏と共に ↓

↑「白鳥会」第一回発表会



ヤマトケル執筆中の有馬エミ(白鳥見なみの母)



↑ モーリス・ベジャール氏と共に

白鳥バレエ75年の軌跡



小牧正英氏と共に



マリーゴフオンティーン女史と共に



ポリシヨイバレエメッセル女史と共に



創造期 <1949-1957>

1942年、鹿児島県の豊倉舞踏研究所に入所した白鳥みなみは、1949年正に舞踏家島克平、長野トキ子夫妻に師事し、高校1年生で早くも、独立した。しかし、さらに本格的なクラシックバレエに取り組むために、小牧バレエ学園(東京)に入所、正規な訓練を経て今日に至っている。創設以来、年2回の発表会を行い、数多くの依頼舞台を白鳥が中心になって活動し、つねに盛況だった。また時代が戦後文化意識の昂揚期とあいまち、バレエに対する意識を深め若い踊り手志望もふえ、その技術水準も向上していった。

師の島・長野夫妻より「白鳥会」を任せられ、「白鳥みなみ」の名を得て、同会を継続することとなった。しかし門下生より独立の研究所が2カ所でき、都合3団体で、鹿児島のバレエは開花期を迎えたのである。白鳥会では門下生の少人数と力を合わせ鹿児島におけるバレエ正統であり、草分けであることから、クラシックバレエの正しい教育を授けることに努めた。しかし当時、廃寺跡、兵舎跡をてんでんとし、ポータブルをさげての訓練と舞台活動は、草創期の苦難をじゅうぶん物語って余りあるものがある。

しかし、わが国屈指の戦災地で、荒廃し、混迷した終戦直後の鹿児島で、いち早くバレエ公演し、市民に美しく、たくましく生きる喜びと意欲を与えた印象は、今も多くの市民の心に生きている。



シンガポール日本大使館表敬訪問



バレエリュス 作品 小牧正英 振付「シェヘラザード」鹿児島初演
ゾベイダ：白鳥見なみ、シャー・リアル王：小牧正英



「耶馬台」

舞踏家養成期 <1958-1967>

1958年、練習所を新築落成して、研究所としては大きな安定を得た。同時にここの練習所が白鳥バレエ団の今日の確固たる基礎を築くことにもなった。

この期は、前期にできあがった門下生を舞台にのせ、プロとして活躍させる、舞踏家養成の重要な時期である。白鳥としては最も力をそそいだ充実した十年といえよう。

つまり、中央と比肩することのできるバレエの人材養成のため、自ら東京に向くだけでなく、中央との交流、とくに振付師を招いて指示や指導を受け、実質的に大きな進歩発展を見るに至った。そして上演されるバレエも、新作あり、クラシックありで多彩だった。とくに古典バレエだけでなく、自分の郷土鹿児島に根ざした創作バレエに意欲を示した。したがって県民のバレエに対する理解を早め、大きな支持を得て、新しい時代の新しいバレエとして注目された。

とくに研究所のサイドワークとして、菓子製造を行い、生徒養成のためにアルバイトを与え、バレエのレッスンに効率的な運営を可能にしたのも、舞踏家養成に、いかに力をそそいだかが知れよう。

やまとへのみち
日本バレエ協会フェスティバル(東京文化館にて)
白鳥見なみ、久光学生のバ・ド・ドゥ



ジゼル：白鳥見なみ
アルプレヒト：ミッシェル・ブルエル



- 1949 ・ 白鳥会設立(現 白鳥バレエ)
- 1955 ・ 白鳥見なみ名を師 長野トキ子より授かる
・ 白鳥バレエ団結成
- 1958 ・ 白鳥バレエ鹿屋支部創設
- 1968 ・ 白鳥バレエ団創立20周年記念公演(「ジゼル」)「白鳥の湖」
- 1969 ・ 文化庁主催芸術祭参加「ヤマトタケル」
・ 九州民音主催「ヤマトタケル」「ジゼル」
ロシア民族舞踊にて九州各都市の巡回公演開始
- 1971 ・ 文化庁助成 九州沖縄文化協会主催沖縄公演「ヤマトタケル」
- 1972 ・ 鹿児島県バレエ協会初代会長に白鳥見なみが就任
- 1973 ・ 鹿児島県「青少年のための芸術鑑賞事業」バレエ公演
以後毎年20会場
・ 文化庁主催芸術祭参加(ドラマチックバレエ「耶馬台」)
・ 大阪公演「耶馬台」
- 1975 ・ 白鳥見なみヨーロッパ・モスクワ留学
レニングラードバレエ団セルゲエフ氏、ドジンスカヤ氏、
・ 20世紀バレエ団モーリス・ベジャール氏、
・ ポリショイバレエ団メッセレル女氏の指導を受ける。
- 1976 ・ 全日本舞踊功績賞受賞(白鳥見なみ)
・ 文化庁芸術祭参加作品、南日本放送制作
バレエストーリー「墓標の賦」制作
・ 民法祭参加作品、南日本放送制作バレエストーリー
「遠い貴方」制作
・ フランスの金賞受賞者ミッシェル・ブルエル氏を招き、
ジゼル全幕を共演
- 1977 ・ 第1回鹿児島県芸術文化奨励賞受賞(白鳥見なみ)
- 1979 ・ ミッシェル・ブルエル氏を招き 白鳥バレエ30周年記念公演
「ジゼル」全幕を共演 演出 小牧正英氏
- 1980 ・ シンガポール文化省主催
シンガポール芸術節閉幕公演として招待される
(「古代への追想」「白鳥の湖」「日本の郷愁」を上演)
- 1981 ・ ワルシャワ国立劇場第一舞踊主ジスワス・スィオロー氏を招き、
「くるみ割り人形」全幕を共演
- 1982 ・ ジスワス・スィオロー氏を招き、「眠れる森の美女」全幕を共演
- 1983 ・ 日本バレエ協会九州南支部初代支部長に白鳥見なみが就任
・ 全国合同バレエの夕べ 東京公演
・ 白鳥バレエ定期公演「くるみ割り人形」全幕

Timeline

文化庁芸術祭参加作品「ヤマトタケル」1969





文化庁芸術祭参加作品 邪馬台
卑弥呼：白鳥見なみ
マワカ：小林恭



くるみ割り人形 全幕



クララ・白鳥見なみ
くるみ割り人形・土田三郎



75 years of History of the Shiratori Ballet Company

対外公演活動期 <1968-1978>

1968年、白鳥会創立20周年記念講演会を開催したが、2日間連続講演に超満員の盛況からして、クラシックバレエが根底的に定着し、確実な基礎づけができたこととみて、この20年間の苦闘の成果を評価した。そこで同年、研究所と併用して対外的な公演活動を主目的とする「白鳥バレエ団」を結成し活動することとなった。

1969年に文化庁主催の芸術祭参加公演として「ヤマトタケル」全3幕を上演したのも、その活動の一つである。同公演は東京のバレエ界はもとより、多くの観客が、無名の地方バレエ団に惜しめない拍手を送る超満員の盛況で、当バレエ団にとっては歴史的な公演となった。観客動員に力をそそいだのは勿論総員四十余名、創作から作曲、演出まで全部オリジナルな創作バレエを鹿児島からひっさげの東京公演という意欲からであった。

このことは、教育放送12チャンネルでも、画期的なこととして、ドキュメンタリーの制作となり放映された。さらに1973年に再度、芸術祭に参加して、創作バレエ「邪馬台」を上演、舞踏界に地歩を固めるに至った。

また、鹿児島県教育委員会主催で、バレエの県内巡回公演を一手に担うことになったが、当団としては、とくに芸術文化に恵まれない離島へき地の公演に力をそそぎ、大きな影響を与え続けている。一方、海外の一流バレエ団と交流して水準の向上を図ることも努めている。1975年には、白鳥自身渡欧しレニングラードバレエ団のセルゲーエフ氏、ドジンスカヤ氏、20世紀バレエ団モーリスベジャール氏、またボリショイバレエ団のメッセレル氏らの、すぐれた指導者を訪問、意見の交換及び指導を受ける。とくに欧州バレエ界の第一人者フランスのミッシェル・プリユエル氏と親交を結び、氏を鹿児島に招いて「ジゼル」全幕を共演した。以来、鹿児島と欧州バレエとの窓口をつくることに意欲を燃やし続けている。しかし、白鳥の作品は日本のバレエを作ることに専念しているので、日本の古代を追求するものが多いのも高い評価を受けている。

そして、日本文化を支える地方文化として、地方の芸術文化の振興に大きな意欲と使命感をもって、活動している。



文化庁芸術祭参加作品「ヤマトタケル」クマノ新室楽



文化庁芸術祭参加作品「平家物語」建礼門院：白鳥見なみ 高倉帝：有馬理



日露文化交流ロシアジョイント公演



高野山開創1200年記念イベント
空海劇場 in 高野山2015
宇宙観 ~平安絵巻5景~



海外交流活動期 <1978-1988>

1975年白鳥みなみのヨーロッパ・ソ連留学と有馬秀人の鹿児島県育英財団国学留学生としての1年のヨーロッパ留学及び1976年のミッシェル・ブルエル氏との共演を契機に海外との交流期に入る。ヨーロッパで生まれ育ったクラシックバレエが鹿児島でどう育ったのかを確認するとともに、より一層の飛躍を目的とし、昭和54年白鳥バレエ団30周年記念公演に再びフランスよりミッシェル・ブルエル氏、ポーランドよりワルシャワ国立バレエ団第一舞踏手ジスワス・スィオロー氏を招き3カ国合作のジゼル全幕を公演、又30周年を機に白鳥みなみ後援会が設立され毎年の公演活動や海外公演等の援助に乗り出す事となった。

1980年・1982年には再度ポーランドよりジスワス・スィオロー氏を招き「くるみ割り人形」全幕「眠れる森の美女」全幕を上演し海外の影響を受け国際的なバレエ団を目指している。



「ジゼル」全幕



「ウエスタン・シンフォニー」

- 1984 ・ 白鳥バレエ定期公演「くるみ割り人形」全幕
・ 全国合同バレエの夕べ 東京公演
- 1985 ・ 白鳥バレエ定期公演「くるみ割り人形」全幕
- 1986 ・ 白鳥バレエ定期公演「ワルプルギスの夜」
- 1987 ・ 白鳥バレエ定期公演「くるみ割り人形」全幕
- 1989 ・ MBC賞受賞(白鳥見なみ)
・ 全国合同バレエの夕べ 東京公演「ラ・シルフィード」より森の景
- 1990 ・ 文化庁主催芸術祭参加「平家物語」東京公演
・ 白鳥バレエ40周年記念公演「平家物語」
- 1991 ・ 橘秋子賞功労賞受賞(白鳥見なみ)
- 1992 ・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「おしどり物語」公演
・ 南日本文化賞受賞(白鳥見なみ)
・ 民音例会 白鳥バレエ「平家物語」公演
・ 鹿児島県離島芸術劇場「白鳥の湖」全幕公演
- 1993 ・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「おしどり物語」公演
・ 日本バレエ協会 冬季定期公演「おしどり物語」東京公演
- 1994 ・ 鹿児島市民文化ホール自主文化事業
白鳥バレエ公演「平家物語」
・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「おしどり物語」公演
- 1995 ・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「夕焼け色のさようなら」公演
- 1996 ・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「夕焼け色のさようなら」公演
- 1997 ・ 日露文化交流ロシアバレエジョイント公演開始
・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「夕焼け色のさようなら」公演
- 1998 ・ 日露文化交流ロシアバレエジョイント公演
・ 椋鳩十児童文学フェスティバル「マヤの一生」公演
- 2000 ・ 白鳥バレエ創立50周年記念公演「ロミオとジュリエット」
・ 日露文化交流ロシアバレエジョイント公演
- 2001 ・ 日露文化交流ロシアバレエジョイント公演
- 2003 ・ 地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞(白鳥見なみ)
- 2004 ・ 鹿児島県民表彰受賞(白鳥見なみ)
・ 椋鳩十生誕100周年記念フェスティバル
「マヤの一生」「おしどり物語」公演
- 2006 ・ 霧島市合併記念バレエ公演「ヤマトタケル」
- 2008 ・ 白鳥バレエ公演「ジゼル」全幕
・ 舞踊文化功労賞受賞(白鳥見なみ)
・ かぎん文化財団賞受賞(白鳥五十鈴)

「ロミオとジュリエット」
ジュリエット：白鳥五十鈴
ロミオ：ドミトリー・スミルノフ



1969年度 文化庁芸術祭参加作品
「ヤマトタケル」2014再演



75 years of History of the Shiratori Ballet Company



バレエ団開花期 <1989-2000>

1990年、白鳥バレエ団は創立40周年を迎え1月、記念公演として白鳥みなみが、長い年月暖め、膨らませた、白鳥みなみの創作バレエの集大成ともいうべき「平家物語」発表、次いで10月、同じく「平家物語」で文化庁芸術祭に3回目の参加を果たし激賞を受く、これらの功績により日本バレエ界の権威である「橘秋子賞」を受賞。このことはMBCテレビ、ドキュメンタリードラマ「平家に魅せられた一族、その愛」として放映される。また1992年には民音例会に取り上げられ「平家物語」を公演。

1994年10月、鹿児島市民文化ホール自主文化事業に鹿児島の文化団体として初めて取り上げられ「平家物語」を公演するなど、バレエ団の開花をみた。

1992年には南日本文化賞受賞。椋鳩十作品のバレエ化にも取り組む中、離島での「白鳥の湖」全幕公演や、民音例会での「平家物語」上演など、本格的な公演が多く上演されるようになった。1997年よりロシアとの交流公演を重ね2000年白鳥バレエ創立50周年記念公演では「ロミオとジュリエット」にてロシアスターズバレエジョイントコンサートにて白鳥五十鈴が主演。2003年地域文化功労者文部科学大臣表彰(白鳥見なみ)受賞。



文化庁芸術祭参加作品「平家物語」全三幕



文化庁芸術祭参加作品「平家物語」全三幕



「シェヘラザード」



楽しい劇場へようこそ



文化庁芸術祭参加作品「平家物語」全三幕

21世紀 <2001-2023>

2004年鹿児島県民表彰(白鳥見なみ)受賞。2006年には、1980年以来26年振りの「ヤマトタケル」を再演。主役を白鳥五十鈴が継承した。その後も白鳥見なみのおほこであったドラマティックバレエ「ジゼル」全幕、「平家物語」など白鳥バレエの色濃い作品で新しい観客層をつかんだ。中でも2009年の60周年記念公演「平家物語」は2日間公演となり、4,000人の観客を集めた。2017年「楽しい劇場へようこそ」というスタイルを打ち出し、バレエの楽しさを観客に色々な角度から見て頂くための公演打ち出した。芸術文化奨励賞受賞を受け、祝賀公演には、かねてより上演したかった「シェヘラザード」「シヨピニアーナ」「ロシア民族舞踊集」のトリプルビルを上演した。2019年 白鳥バレエ創立70周年「平家物語」オーケストラ上演。2023年「楽しい劇場へようこそ」Vol.2は、パンデミックを越え“生”を見つめる日常から生まれた「劇場礼賛」のステージとなり、たくさんの感動の声がよせられた。

- 2009 ・ 白鳥バレエ創立60周年記念公演「平家物語」2日間
・ (白鳥見なみファイナルステージ 白鳥五十鈴襲名)
- 2010 ・ 文化庁主催地域文化芸術振興プラン「ジゼル」伊佐市公演
- 2011 ・ 宝山プレゼンツシアターミュージックコンサート出演
・ 島津義秀の世界 in 大阪 白鳥五十鈴ゲスト出演
鹿児島市立吉野小学校創立140周年記念
・ 芸術鑑賞事業白鳥バレエ公演
- 2012 ・ 白鳥バレエ公演 DOUBLE BILL 「ライモンダ」
プロローグ〜2・3幕、「ラ・シルフィード」森の景
- 2013 ・ 河口洋一郎教授 アートの森就任記念コラボレーションステージ出演
- 2014 ・ 始良市青少年芸術鑑賞事業 白鳥バレエ学校公演
・ 白鳥バレエ創立65周年記念「ヤマトタケル」
- 2015 ・ 高野山開創1200年記念「空海劇場2015」
・ 第10回アジアンかごしま青少年芸術祭 祝舞
第30回国民文化祭「洋舞フェスティバル」オープニング、古代への追想
- 2016 ・ 白鳥バレエ公演「ジゼル」全幕
- 2017 ・ チャリティーイベント ジュニアバレエコンサート
・ 白鳥バレエ公演「楽しい劇場へようこそ!」
・ 鹿児島県芸術文化奨励賞受賞(白鳥五十鈴)
- 2018 ・ 桜ヶ丘中央幼稚園 芸術鑑賞会 白鳥バレエ公演
・ 薩摩川内市立川内中央中学校 芸術鑑賞会 白鳥バレエ公演
・ 白鳥バレエ公演 TRIPLE BILL
・ 「シェヘラザード」「シヨピニアーナ」「ロシア民族舞踊集」
・ 日本バレエ協会第1回指導者特別賞受賞(白鳥見なみ)
- 2019 ・ 白鳥バレエ創立70周年記念公演「平家物語」
- 2021 ・ 南日本新聞社創立140周年記念事業
遠藤彰子展・白鳥五十鈴コラボレーションステージ
- 2023 ・ 「美しき神々の舞」白鳥五十鈴ゲスト出演
・ 白鳥バレエ公演「楽しい劇場へようこそ」Vol.2

※1949年より年1回の定期発表会、年1回の市民文化祭
1973年より年20~30会場の巡回公演を50年間実施

モルダヴィア組曲



平家物語

15 MON

平家物語

10

運命と、共に舞う。

平家物語

The Tale of the HEIKE

全二幕

白鳥バレエ創立70周年記念公演

11月30日(土) 鹿児島市民文化ホール第一

白鳥見なみ

平成6年星洲鹿児島市民文化ホール管理公社文化事業

白鳥バレエ団 ●制作バレエ ●全3幕

平家物語

●文化庁芸術祭参加作品

平家の盛衰を舞った華やかな平家恋が

10月29日(土)

午後6時30分開演

鹿児島市民文化ホール (第1ホール)

Russian Ballet Festival

ヤマトタケル

～花びらへの恋～

白鳥バレエ公演

GISELLE

シゼルの恋

悲しくも
甘い森の中の
恋物語

4/29

鹿児島市民文化ホール

白鳥バレエ 創立60周年記念公演

平家物語

全二幕

2009 11/21, 22

白鳥バレエ創立65周年記念公演

ヤマトタケル

文化庁芸術祭参加作品

全二幕

美しく舞う古事記
神話の影に一つの恋。

オーケストラで舞うオリジナルバレエ大作。

2014 11.30 sun

鹿児島市民文化ホール (第1ホール)

10/25

Tel:099-222-6536

貴方はもう
ジゼルを
観ましたか?

春の伊佐、精霊舞う

Giselle

3/28

伊佐市文化会館

白鳥見なみ

白鳥バレエ公演

DOUBLE BILL

2012 2/11 SAT

宝山ホール

空海劇場2015

17,000+18,000

楽しい劇場へようこそ

vol.2

1月28日(土)

川商ホール 第1

白鳥見なみ、13年ぶりの舞台復帰。

GISELLE

11.8

陰陽

土生

Triple Bill

11.30

白鳥バレエ公演2018

SHIRATORI

白鳥バレエ

楽しい劇場へようこそ

12.1

宝山ホール



白鳥母娘トーク

対談：白鳥みなみ vs 白鳥五十鈴

75周年を迎えて、親子二人で白鳥バレエの創作した演目について振り返ってみました。そして今年11月に開催する75周年記念公演の創作する演目について抱負を語りました。

五十鈴 75年間、毎年毎年発表会や巡回公演、買取公演、本公演など次から次へと上演してきたわけですが、特に創作や上演に関して何を大事としてやってきたのですか？

見なみ 皆さんが喜んで感動してくださるようなものを作ってきました。「これがバレエなんだね！」と共鳴してくれるような…

五十鈴 楽しかったですか？

見なみ ん?! 楽しかったです! (笑) 子供たちは夢を持って生きられるよう作品にしたかったし、本公演は大好きなものを作るだけ。

五十鈴 うん。夢を親子で描いてきたわけね。私は、自分の感性で感動した上限で、そこを目指して作品を創るような気がするんだけど。自分の創作意欲を掻き立てた人とか物とか何かあった？

見なみ 私はね、同情が上回る主人公に共感して作品にしてしまうの。

五十鈴 じゃあやりたい放題ってことだね。

見なみ ヤマトタケルにしても平家にしても。

五十鈴 じゃあ、なんかずっと「空想の中にいる人」って感じだね。というか、なんかやっぱり幼い頃に戦争を経験してるから、兵士というか戦いに関して強い印象が残っているんじゃない？

見なみ そうかもしれない。小さい頃、特攻の立派な兵隊さんを送り出す集会所をしていて、身近だったからね。本当にわずかな時間“生”の最後を過ごす時間を共にしてるわけだからね。

五十鈴 今、過去の作品を見渡して、特に大事だと感じる作品を挙げられる？

見なみ 全部だよ。『平家物語』や『ヤマトタケル』『耶馬台』以外でも。

・「初秋の幻想」逃げ延びる牛若丸と弁慶たち。五条で月夜に笛を吹く牛若丸と月見草の精と戯れる。弁慶と相まみえた牛若丸だが、戦いのさなか美しい月見草が切り落とされた。その草花をいたむ義経の涙。

・「ラインの悲歌」女王と王の悲恋。王の夜の姿は大蛇であった。その姿を見た女王は、ライン川に身を投げ悲しみに耐えきれず王も川に身を投げるライン川の幻想。

・「ウェスタンシンフォニー」アメリカの西部の情景。

・「さくらじま」桜島ののどかな農村の風景と桜島の自然の驚異。暮らす人々と生命の儚さ。でも溶岩に全てのみ込まれたその地、小さな小みかんの花が咲き始める。

・「メコン川」ベトナム戦争を描いた作品。



※寂光院「平家物語」取材時

五十鈴 楽しいものも幻想的なものも社会的なものもあるね。

見なみ 五十鈴は、どんなふうに創作をするの？

五十鈴 私は…自分が楽しいものだね。(笑) 今は、バレエのクラシカルな美と現代的なものの両方が心に響く形で、現代の人たちに届くように、生き生きと構成したくて、うちは国立劇場じゃないから、ホームチームとして愛される「白鳥」ならではの感動的なオリジナル作品を目指したいです。

見なみ それは大事。私の場合は、地域を大切にするというものがあるから。各国、アメリカとかロシアとか海外の文化もやりがいがある。

五十鈴 やっぱり異国情緒って楽しいもんね。

見なみ みんなが親しめるような作品っていうのも大事でそれを「白鳥」らしい形でしたい。

五十鈴 これからは100年目指して欲しいですか？

見なみ いや、ただ…役に立って暮らしたい。いい世の中になって欲しい。日本が良い国で世界のお手本になりながら。ただ、世界に日本のバレエを見てもらいたい。それを必ずやっってくださいって言った評論家たちは亡くなったから、それをやっって欲しい。それをあなたに踊って欲しい。他のどんな有名なプリマを連れてきても駄目。

見なみ あなたは作品としては、何が印象に残ってる？

五十鈴 私のイメージって「ヤマトタケル」が最も印象に残ってて、白鳥先生も脂の乗った時代だし、あと「ジゼル」かな。そのドラマティックなものとしてバレエをインプットしてるから。

五十鈴 まあ、いつも喧嘩しながらも作品創りには大切な鏡。師として頼りにしていきます。11月の75周年公演では、白鳥見なみの幼少からを描く構成だから、どうぞ共に、良いドラマとなるよう、色々なエキスを私にください。ありがとうございます。



photo : Isuzu Shiratori

白鳥バレエ レパートリー (創作)

白鳥見なみが創作・脚本または演出したバレエの演目は70以上。(小作品を除く)

白鳥見なみ 作品

- **ヤマトタケル (全三幕)** ※文化庁主催 芸術祭参加作品
古事記、ヤマトタケルとクマソタケルのくだりを、郷土のバレエとして創作した。クサヒメという架空のヒロインが登場することによりドラマティックな作品となった。
- **耶馬台 (全三幕)** ※文化庁主催 芸術祭参加作品
卑弥呼の邪馬台国を描いた。
- **平家物語 (全三幕)** ※文化庁主催 芸術祭参加作品
一族殺し合うことなく海底浄土に散った平家一族の栄華と滅亡を描く歴史絵巻。雅やもののははれ、日本人の心を描く一大叙事詩。

※芸術祭参加作品

- **バレエストーリー 墓標の賦**
※バレエドラマ (南日本放送)
- **バレエストーリー 遠い貴方**
※バレエドラマ [南日本放送民放祭参加]

- **初秋の幻想**
十五夜、義経が京の五条で笛を吹く。月夜に咲く月見草を愛でながら吹く。弁慶と出会い剣を交える。その時、弁慶の薙刀で切り落とされてしまった月見草の死を悲しむ優しい義経と月見草の精の悲恋を描く。
- **風葬**
鳥の風習である風葬をバレエ化した。その骸の上、魂たちが踊る。(曲：林光 ほか)
- **カナリア**
「カナリア」という曲から発想した作品。慣れない都会に行った若い女の子が、心疲れ果て帰ってきた。それでも優しい郷土の人々に癒され明るさを取り戻していく。
- **ラインの悲歌**
ライン川の古からの深い歴史にドラマを感じて作った作品。山あいの広場で男女が出会う。お付きや小姓、そして姫と王子。和やかな情景。次第に惹かれ合う姫と王子。惹かれた姫は王子の様子を垣間見ようと後をつける。すると王子は悲しきかな夜になれば大蛇になってしまう。それを知った姫は悲しみのあまりライン川に身を投げた。王子もそれを悲しんで後を追う。川底で2人は結ばれたのだろうか？
- **再会**
- **背信**
主人と女中の背信を描いた。

- **ウエスタンシンフォニー**
アメリカ西部の情景。カウボーイと馬、市長やその街に赴任した女教師、貴婦人、街の人たち、インディアンや子供たちの情景を描いた。古き良きアメリカを語る老人は思い出にふけりベンチに腰をかける。
- **さくらじま**
薬売りや、端物や食物を売る人々。街の情景。そこへ噴火が始まり、逃げ惑い溶岩に埋まる人々。その埋まった土から小みかんの花が咲く。立ち上がる人々のエネルギーが新たな光となる。
- **望郷**
- **流浪**
ジプシーを描いた作品
- **ふるさと**
農業を営む活気ある人々の営みを描いた作品
- **メコン川**
ベトナム戦争を描いた作品。戦争の無惨さ。かつて広島で川に最後の水を求めて入った人たちの事にも重ね、メコン川とした。少女の死骸を抱いて嘆く兵士が1人佇む。(曲：林光、原爆小景 ほか)
- **ロシア民族舞踊**
大地を踏み鳴らすロシア民族舞踊はエネルギーと哀愁が溢れて、日本人の心も揺さぶる。《古典へ移す》
- **夕べ野路にて**
日本の子供たちが野辺で遊んでいる情景。鎮守の森があり、寺があり、田んぼがある。鐘の音が聞こえる。日本の貧しい農村の家族。けれども、ささやかな幸せや営みがある。[※西日本芸術祭参加作品]
- **夕鶴**
日本の名作のバレエ化
- **青い鳥**
- **ピーターとおおかみ**
- **雪の女王**
- **エチュード**
- **古代への追想**
ヤマトタケル完結編
- **日本の郷愁 ~Invitation Kagoshima~**
春夏秋冬の日本の歌でふるさとの情景を描く。
- **アトリエの幻想**
名画にまつわる幻想
- **いのちもゆ 命燃ゆ**
細胞と人体の神秘を表す。[献血フェスティバル]

- **生命 ～いのち～(全四章)**

生命が生まれて死ぬまでの物語。

白鳥見なみが、弟(故 有馬秀人)の一生を描いた。

- **シベリアへ**

シベリアの辺境の村に流されたジプシー(女囚)達が最後の時を過ごしている。牧師が慰める。恋人が駆けつける。赤子との別れ。最後の別れの踊り。別れの時は過ぎ、シベリアへ引かれていく。

- **鶴 ～亡き兵士のためのレクイエム～**

ロシアの情景と営みの中、死んだ兵士たちが鶴になって戦場から帰ってくる。

- **ある日の晩餐会**

ヨハンシュトラウスのワルツで、若い士官と社交界の女性たちが優雅に踊る。《喜歌劇「こうもり」より》

- **宇宙観 ～平安絵巻5景～**

平安の世、平家の栄華と空海の修行の日々と開眼。空海と清盛の出会い。不動明王と大日如来を中心とした密教の世界観を描いた。

- **我が鹿児島**

曲：おはら節、茶碗蒸しのうた、かごしまナポリターナ。素晴らしい景観を誇る桜島。木花咲耶姫に守られ、みかんの花咲く桜島。素朴な人たちの営みを描く。

白鳥五十鈴 作品

- **Sing! Sing! Sing!**

- **RED**

- **トゥオネラの白鳥**

- **ヴィヴァルディの四季 ～春から夏へ～**

- **メメント・ヴィータ**

エレナ レンコワ 作品

- **ダッタン人の女たちの踊り**

- **東洋の組曲**

- **フラメンコ**

- **踊りの祭典**

- **恋する乙女**

- **フローラの夢**

- **楽しい雨**

- **春の昔話**

ジュニア向け創作バレエ 作品

- **水草の詩**

農村の川辺の物語。水草の一生を描いた作品。蛍のいる草むらに流れついた水草。それを見ている柳のおじさん。

- **飛べない小鳥**

親子の鳥がいる。カラスに襲撃され翼を痛める小鳥。いたわる母鳥と四季を眺める。やがて冬が来て雪が降り積もっていく。「白い馬車が迎えに来るよ。」と声をかける母鳥。母鳥と小鳥を雪が覆い尽くす。その氷を砕いて雪割草が咲く。

- **白雪姫**

- **親指姫**

- **コゼット**

- **五人の騎士**

- **かぐや姫**

- **舌きりすずめ**

- **森は生きている**

- **鳥の友達**

- **スーホーの白い馬**

- **人魚姫**

- **ピーターパン**

- **みにくいあひるの子**

- **森の木の下**

- **雪人形物語**

- **オーレ・ル・コイエ**

- **青い鳥**

- **となりの町は遠かった**

- **おしどり物語**

- **虹の彼方に**

- **夕焼け色のさようなら**

- **マヤの一生**

- **海と真珠 ファンタジー**

- **クラブフェンの森で**

レパートリー

古典バレエ 作品

- 白鳥の湖 (全幕)
- くるみ割り人形 (全幕)
- ジゼル (全幕)
- ワルプルギスの夜 (全幕)
- マスカレード (全幕)
- シェラザード (全幕)
- オーロラの結婚
- コッペリア (全幕)
- 眠れる森の美女 (全幕)
- ドン・キホーテより
- レ・シルフィード
- パキータ
- ラ・シルフィード
- フレスコ
- ボレロ
- パ・ド・カトル
- ライモンダ (プロローグ付 2・3 幕)
- バヤデルカ
- 真夏の夜の夢 (妖精の景)
- パリの喜び

75周年を迎えて

少女時代より、今日までバレエ向上のみで走り続けて参りまして、ふと考えましたら、75年の月日が経っていたということでございます。先ず、真っ先に申し上げねばなりません事は、歳若い、無力な私を信頼してついてきてくださった各時代の門下生、並びに御父兄様、県や、市の行政関係、各業界の皆様、後援会の皆様の温かいご理解と励ましがあったこそ、無我夢中で走り続けて参れた75年でございます。改めて厚く御礼を申し上げます。

温かいご支援、励ましを下された恩ある後援会の諸先生方の多くが、何の御恩に報いる事も果たせない中に、鬼籍に移籍されていらっしゃる現実をしみじみと思い知り、臉の熱くなる思いでございます。歳を経ると言うこともあまり良い事ばかりでは無いようでございます。

私は夢中で、バレエ向上のため走り続けられましたのも父と母の力のお陰でございます。事業家の父は創作の舞台作りのための資金供給、これは初代の先生の時代からです。母とは何をするにも一心同体でした。そして、弟有馬秀人は文学座に席を置きながら東京と鹿児島を行き来してくれました。2番目の弟、賢太郎はダンサーとしても活動する中、菓子製造業を営み、団員たちの生活を支えました。1番下の弟、理は、当時日本で最



も注目を集めていた松山バレエ団で活躍し、白鳥バレエの本舞台を支えました。白鳥バレエの75年は、団員、家族皆一体となり成し得たものだったのです。

私は、鹿児島県バレエ協会の設立者としてのバレエ協会の企画事業で学校巡回公演を毎年県内20回から30回の公演で、学校巡回公演の初期、会場も町の公民館だったり、見る人、踊る人、手が取り合えるほどの狭い会場でありました。私たちの汗に窓から団扇で風を送ってくださる微笑ましい風景もあり、今まで大きな体育館に座る生徒たちの顔は怜悧に輝き、改めて県の行政施策の成果を感じる次第であります。今年巡回公演51年目となりお役に立って嬉しゅうございます。

文化庁芸術祭参加は20周年『ヤマトタケル』、30周年『邪馬台』『ジゼル』、40周年『平家物語』となります。橘秋子賞、文部科学大臣表彰地域文化功労者を頂きました。『平家物語』は日本の「白鳥の湖」だと高い評価を頂いたのも、中央集権的なバレエ界に於いて地方から発信できたというのは、作品作りに走り続けたことが実って嬉しゅうございました。

75年間に創作し皆様にご覧いただきました作品が、文化庁芸術祭参加作品大作5、創作バレエ34、ジュニア向け創作

バレエ25、古典バレエ19(これは上演作品)、小品700以上、なんと多くの作品を創ったことでしょう。私のバレエ人生に大きな意義と使命感をもたらしてくれました。そして東京、大阪、海外、九州各県と多くの公演を持てた幸せなバレエ生涯でございました。

60周年に白鳥を襲名し、バレエ生涯に意欲的に取り組んでいる娘、白鳥五十鈴を鹿児島の未来のバレエ界を考える時、とても頼もしい気がいたします。私、白鳥見なみは、白鳥五十鈴の活動を楽しみに後方から応援する形で指導の立場で、私が長年にわたり築きあげた白鳥メソッドを体系化していく中で、今後もバレエに携わっていく予定です。今までの温かいご支援に改めて御礼申し上げます。

これからもバレエが持つ美しさ、その純粋な魅力を白鳥五十鈴を中心に新しい世代のバレリーナ、バレリーノ達とともに皆様にお届けできればと思います。どうかこれからも鹿児島においてバレエと言う美しい世界を愛し続けてくださいませ。

私を支えて下さった皆様に
永遠の感謝を込めて

白鳥見なみ

伝統を引き継ぐ承継者たち

白鳥五十鈴

Isuzu Shiratori



叔父・有馬秀人、祖母・有馬エミ、母・白鳥見なみ

私が、表面に立たせてもらってからの50周年から74年目までの間、特に65周年からの10年間、自分の持てる力全てをかけて良い舞台のために費やしてきた。でもこうして、創立当初からを細かにたどってみると、白鳥見なみが成してきたことを繰り返したどり、遂行してきたに過ぎない。その良さを現代でも克明に刻み込みたかった私は、プロデューサーや発信者として、または、ここがと言う切り口を、注目されることにより周知できるので、たくさんの協力者やマスメディアに対して説きに走ることとした。

再演にかけては、より洗練されるべき年月を経ているし、総じて、美しい舞台となったと自負している。しかし、母の生んだ手本のない時代、創作の豊かな情緒性や迫力は古い写真からも伝わる。特に芸術祭出品から海外のプリンシパル招聘公演、大掛かりな作品の買取公演や他団からの招聘公演など、一流バレエ団としての活動を見るに、どんどん躍進していく凄まじい活力を感じる。それを幼少知っていた私は、今果たはして?…と思う。

確かにバレエの技術は現在さらに研究が積み重ね高まった。でも人は何に感動するのか? そう考えたときに、芸術性、作品の伝わり方は昔と比べてどうだろう? …そう振り返る中でも一つだけ信じていることがある。私はそれを感じて育ったがゆえに、私の中に自分のものさしがあって、安心して自分の求めるものを目指して進むことができる。そこまでとは母は知らないかもしれない。若い感性はそれほど有能だと思う。母が書いていない話もある。呉服屋に留まらず、事業家として多岐に及んで経営をしていた祖父である頭首が、もともと芸術の事に白鳥会(白鳥バレエの初代)において惜しみなく資産を継ぎ込んでいた。祖父はマネージメントとオーケストラの食事まで自分のことのように取り組んでいた。

その後、母は踊ることと教えることで、家族を支えてきたのだ。叔父たちの顔も浮かぶ。あの観客の盛り上がりよう。息の合った演技。踊ってしゃべれる役者たちだった。あのように仲の良い家族がいるだろうかと思ったものだが、難しいもので、それぞれ一家を構えるとそうもいかないのが世の常だろうか?



有馬 秀人



有馬 賢太郎



有馬 理

白鳥見なみが築き完成させた日本文化をテーマにしたバレエ演目。その独創性は国内外で高く評価され称賛されました。それを受け継ぐ若き承継者たちの情熱が、鹿児島に新たな息吹をもたらすしてくれることでしょう。



「楽しい劇場へようこそ」メメント・ヴィータ／小林貫太と

私にも一理あると思うと、胸が痛む。

「楽しかった」当然のようにポツリと言う母。

乗り越えてきた道を思うと苦しいことも多かったろう。誰しもそう思っているだろうと思うが、母はそう言う。戦後の何もない時もとにかく楽しくて踊り楽しくて創った…

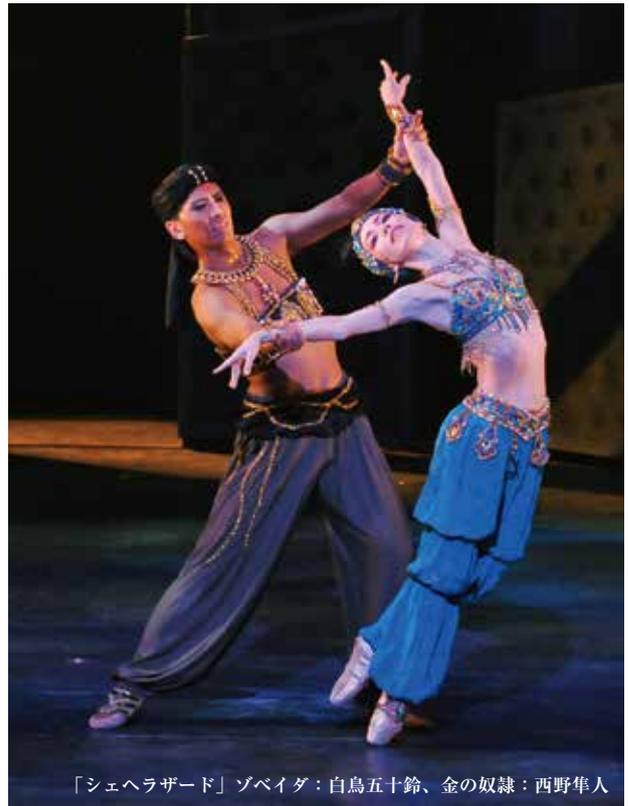
それが白鳥見なみの愛される由縁かと思う。

前号だったか、坂本龍一のコロナと芸術についての言葉を載せたときに、クリエイティブな発想と言うものは「失われている状態から生まれてくるものだ」「制限されていると言う事は、大きなクリエイションのステップにもなる」と言う言葉があった。母や祖母が目を輝かせながら語り合ったであろう。戦後の何もない部屋をイメージすると幸福な気持ちになる。

私の「楽しい劇場シリーズ」はすべて偉大な芸術的なものに対するオマージュのようなものであった気がするが、私は、そこにその家族の群像も見ているのだ。



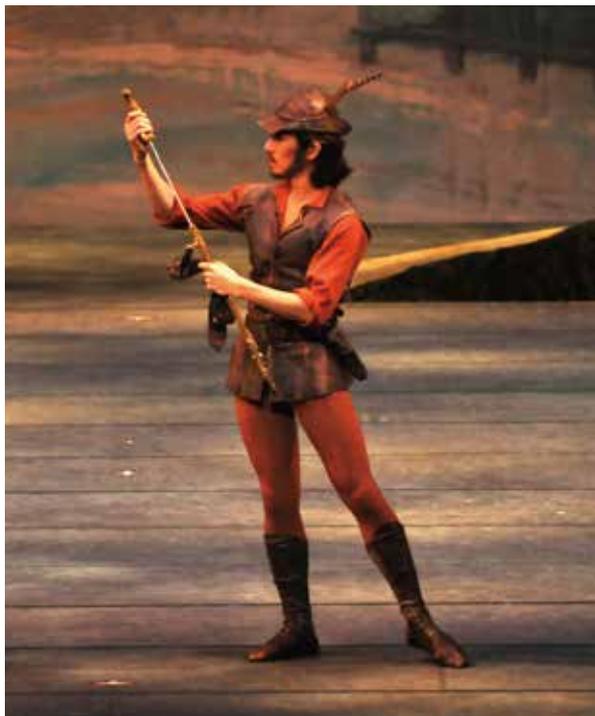
「ショピニアーナ」白鳥五十鈴 バットボルト・ビャンバ



「シェヘラザード」ゾベイダ：白鳥五十鈴、金の奴隷：西野隼人



「美しき神々の舞」西島数博氏と共演ステージのリハーサル



※「ジゼル」ヒラリオン

高校生から白鳥バレエで学ばせて頂き、あっという間に23年の月日が流れました。

白鳥みなみ先生の一番傍らで、作品を創り上げる過程を共有させて頂き、ダンサーとしてだけでなく創作者としても多くのことを学ばせてもらい、私の大きな財産となっております。

白鳥バレエがテーマに掲げている「日本の心と西洋の美の融合」を継承すべく、近年では、日本伝統芸能とのコラボレーションステージとして2021年から毎年、博多座公演「福岡和の祭典」にゲスト出演し、振付作品を発表しております。

昨年7月は、フランス・パリで開催のJapan Expo Paris に和太鼓団体と共演し振付を担当させて頂きました。バレエの本場フランスで、今の自分を試すために参加した公演は、とても緊張し恐ろしく不安でしたが、4日間の全公演はすべて満席となり、高評価の話題を呼びました。



※ウラジーミル・マラーホフ氏と

柳元隆太郎

Ryutaro Yanagimoto



また8月には淡路島で、ロシアの軍事侵攻から避難してきたウクライナのバレエダンサー達と共に、世界平和への祈りを込め踊らせて頂きました。文化芸術には国境がなく、言葉が通ぜずとも、観客とダンサー、そして劇場が平和への願いで一体となったことを覚えました。バレエを通して心を繋ぎ世界が繋がればと強く願っております。

また、大きな出会いがあり、バレエを始めた頃から今も変わらず、ずっと憧れの世界的バレエダンサーのウラジーミル・マラーホフ氏と共演させて頂きました。マラーホフ氏からは、表現力やテクニック等を直にご指導頂きました。鹿児島でバレエを学ぶ方々にも是非この経験を共有出来たらと思い、次の目標として、マラーホフ氏を鹿児島に招聘できるよう進めております。

私が鹿児島を拠点に広く自由に活動出来ますのも、見なみ先生のご理解、そして後援会の皆様のご支援のお陰だと心から感謝いたしております。

育てて頂いた鹿児島に恩返し出来ることは無いかと、2024年5月から理学療法士監修のもと、ロコモティブシンドローム予防、身体ケアプログラム「SOIN BALLET」を考案し、社会福祉法人恵心会にて社会貢献活動としてスタートいたしました。

バレエを通じて地域や人々に貢献できる活動を今後も続けて参りたいと思っております。

PROFILE

17歳よりクラシックバレエを始める。白鳥バレエ 白鳥見なみ、有馬秀人、貝谷バレエ團 土田三郎に師事。2003年から鹿児島県バレエ協会「青少年のための芸術鑑賞事業」参加出演。2005年同協会ソリストに昇格後、現在まで全公演に出演。2010年文化庁主催鹿児島県バレエ協会公演「ジゼル」でヒラリオンを踊り重要な助演キャストとして注目を集めた。2011年宝山プレゼンツ「シアターミュージックコンサート」鹿児島交響楽団の演奏で「くみ割り人形」パド・ドゥを踊る。2015年和歌山県で開催された高野山開創1200年記念「空海劇場」にて空海役で出演。同年鹿児島で開催された国民文化祭では「古代」のヤマトタケルを演じた。2021年より博多座公演「福岡和の祭典」にて日本の伝統楽器とのコラボレーションステージに出演、振付作品を発表。2023年7月フランスで開催のJapan Expo Parisに出演。8月、10月には世界的バレエダンサーのウラジーミル・マラーホフ氏との共演。



Guardians of Tradition



※ショビニアーナ

毎年出演している「青少年のための芸術鑑賞事業」は、今まで鹿児島県内の87ヶ所の学校を巡回しました。巡回公演は子どもたちの距離が近く、反応や表情も間近に感じます。特に、特別支援学校の子供たちは、劇場へ足を運ぶことが容易ではないので、実際の踊りを観ると、目を輝かせて体全体で興奮して歓声をあげて喜んでくれます。この活動はバレエの楽しさや美しさが伝えられるのでライフワークとして続けるつもりです。



※平家物語の妓王（白拍子）

伊地知 真梨

Mari Ijichi



昨年12月に博多座で開催された「福岡和の祭典」では、振付・出演をいたしました。和太鼓や三味線など、日本の伝統的な楽器とのコラボレーションで、クラシックバレエの動きの美しさを魅せながら、日本の心が表現できるような振付を考えました。花道や、せり上がりなど、舞台装置や照明の使い方など、舞台演出に携わってみて学ぶことが多く、舞台に対する見方も変わりました。これからも様々な活動にも取り組んでいくつもりです。

近年は子どもたちへの指導もしており、教えることで自分がどう踊って表現するか、どう伝えるか、を考えさせられ、自分がより良い舞台表現を目指していくための新たな視点を与えられている気がします。バレエの技術や身体づくりはもちろん、未来のバレエ界を担っていく子どもたちが、豊かな感性を育み、バレエの楽しさや表現することの面白さを伝えるつもりです。



PROFILE

3歳より白鳥見なみに師事。主な公演出演作として、文化庁芸術祭参加作品『平家物語』 祇王/小督/白拍子、『ヤマトタケル』 浜木綿の踊り/遊女、『ジゼル』 ベザント/ドゥウイリ、『ライモンダ』 ソリスト、『ラ・シルフィード』 ソリストなど。定期発表会やジュニアバレエフェスティバルでも近年頭角を現し、『白鳥の湖』 オデット、『くるみ割り人形』 金平糖の精、『オーロラの結婚』 オーロラ姫、『パキータ』 パキータ、『コッペリア』 グラン・バ・ド・ドゥ、『ジゼル』 ヴァリアシオン、『ドン・キホーテ』 夢の場森の女王、椋鳩十原作の『おしどり物語』 母鳥等で活躍。近年も、『シェヘラザード』『ロシア民族舞踊集』『ショビニアーナ』、『平家物語』でも祇王役などソリストとして活躍している。

A ballet performance themed around the Japanese culture that Minami Shiratori built and perfected. Its creativity has been highly praised both domestically and internationally. The passion of the young successors who inherit this will surely bring a new breath of life to Kagoshima.

大茂ソニア

Sonia Ohshige



※照国スタジオにて

私はバレエが好きで、踊る事がとても楽しいです。小学4年生からダンスをしているので、私の性格形成や今の私に大きな影響を与えたことは間違いありません。また、バレエの世界が長年にわたって私に与えてくれた他の多くのことにも感謝しています。しかし、プロダンサーなら誰でも同意できることは、外部の環境やそれに伴うすべてが時には困難を伴うことがあり、この世界の一員になることは強い意志を持って望まなければなりません。それが美しさであり、困難をもたらすものに対して懸命に努力を続けます。将来自分が設定した目標を達成したときに感じる喜びと達成感は比類のないものになるでしょう。[大茂ソニア]

私(白鳥五十鈴)とは親戚になるけど、ソニアのお父さんと私はハトコということで、見慣れた大茂家のお顔と美しいルーマニアの血を感じさせられて、白鳥バレエは「西洋の美と日本の心の融合」がテーマですが、生まれながらに血の中に日本とヨーロッパの血が融合しているわけで、色々な意味でとても楽しみです。白鳥バレエの作品には、またこれから触れていってもらいたいです。経歴としては、2018年にルーマニアでコンクール1位に



※「眠れる森の美女」

なった後に、スイスETB Balletschule Theater Ba Sel(13歳～16歳)を卒業して、その後、ロゼラハイタワーPNSDにてプロフェッショナルのバレエ教育を受けました。Craig Davidson(ロイヤルバレエ、バリオペラ座などでも指導する新進コリオグラファー)やStefanie Amdtには近代のコンテンポラリーの大きな流れを作ったフォーサイスのスタイルを学びました。などなどクラシックバレエのアカデミックな教育と共に色々なスタイルも学んできたようです。

そんな彼女は、バレエダンサーという道を選びとろうとしているのですが、バレエや日本の環境についてどのように感じているのでしょうか？[白鳥五十鈴]

五十鈴 バレエは好き？

ソニア (笑) 好きだけど嫌いなところも… 踊るのは好きだけど、体のメンテナンスで日常でも神経を使って過ごすことは大変。メンタルのコントロールなどもです。

五十鈴 どんなダンサーになりたいですか？

ソニア とにかくカンパニーにいて実際に踊り、ソリストとして活躍したい。色々な人も「バレエの世界に入ったらもう出られない」と言っているけど、バレエを始めたら…バレエがもう体の中に入っているから全くやめることは考えられない。ですから、やれるだけやっていきたい。

五十鈴 私たちの作品の中でも頼りにしているからね！そして輝いたたくさんの人に踊りを見せてください。鹿児島の好きな食べ物は何？

ソニア “しろくま”(笑) でも1番はチョコレートが好き。

五十鈴 今後、公演数の多いバレエ団にいくつかオーディションを予定していますが、白鳥バレエでもたくさんの生徒に愛されています。今後の発展を楽しみにしています。

PROFILE

- 2018ルーマニア国立バレエ選手権大会 1位
- 2018ヨーロッパバレエグランプリファイナリスト
- 2018 ESDU DanceStar 3位
- 2018 ESDU DanceStar クロアチア ファイナリスト
- その他のコンクールでも受賞多数

後援会のご案内



白鳥バレエは1949年に白鳥見なみ先生が白鳥会として設立され、その後、白鳥見なみ先生と、その後継者であるご息女白鳥五十鈴先生の卓越した指導力と熱心な研鑽により、これまで4度にわたって文化庁芸術祭に参加されるなど全国的なレベルに達しておられ、郷土鹿児島島の文化振興に、多大な功績を残されております。

そこで、白鳥バレエのさらなる発展を願いつつ、益々質の高いバレエがこの鹿児島島の地において鑑賞いただけるよう。これからも物心両面から、可能な限りの支援を行いと考えております。つきましては、皆様方のご理解とご協力を頂きたくご案内申し上げます。

白鳥バレエ後援会 会長 津曲 貞利

【会員の種類と会費】

○団体会員 年会費 一口 20,000円 ○個人会員 年会費 一口 5,000円

【会員特典】

- ①隔年の本公演チケットをSS席にてご招待、もしくは特別割引致します。(会員の種別、口数に応じた枚数)
- ②追加チケットの先行予約
- ③毎年の定期発表会のご招待
- ④年に一度の交流イベントのご案内。バレエ文化を盛り上げるための交流会を毎年企画しています
- ⑤会報「Swan Lake」の発行
- ⑥関連イベント、キャンペーン等のご案内
- ⑦プログラムにご芳名、会社名を記載させていただきます。(匿名希望の方はお申し付け下さい。)

【入会申込手続】

本会への入会を希望される方は、別添の書類に必要事項をご記入の上、事務局へお送り下さい。後援会会費につきましては所定の用紙にご記入の上、ご送金下さい。(※ホームページの問い合わせ画面からの送付も可能です。)



※令和5年11月 交流の夕べ



※鹿児島トヨタ自動車株式会社 代表取締役会長：諏訪秀治



※令和5年11月 交流の夕べ

【振込先】 [金融機関] 鹿児島銀行 高見馬場支店 [振込口座] 普通 3021817
 [口座名義] 白鳥バレー工後援会 会長 津曲 貞利

【問合せ】 白鳥バレー工後援会事務局 〒892-0841 鹿児島市照国町 12-12 2F
 TEL : 099-222-6536 / FAX : 099-213-9987

【後援会役員】

令和6年5月現在

会 長 津曲 貞利
 名誉会長 大野 芳雄
 名誉顧問 海江田 順三郎
 理 事 秋葉 重登／飯山 英一／岩田 英明／岩元 修士／玉川 浩一郎／中馬 輝彦／山内 聡胤
 山下 大介／米盛 司郎



※令和5年11月 交流の夕べ

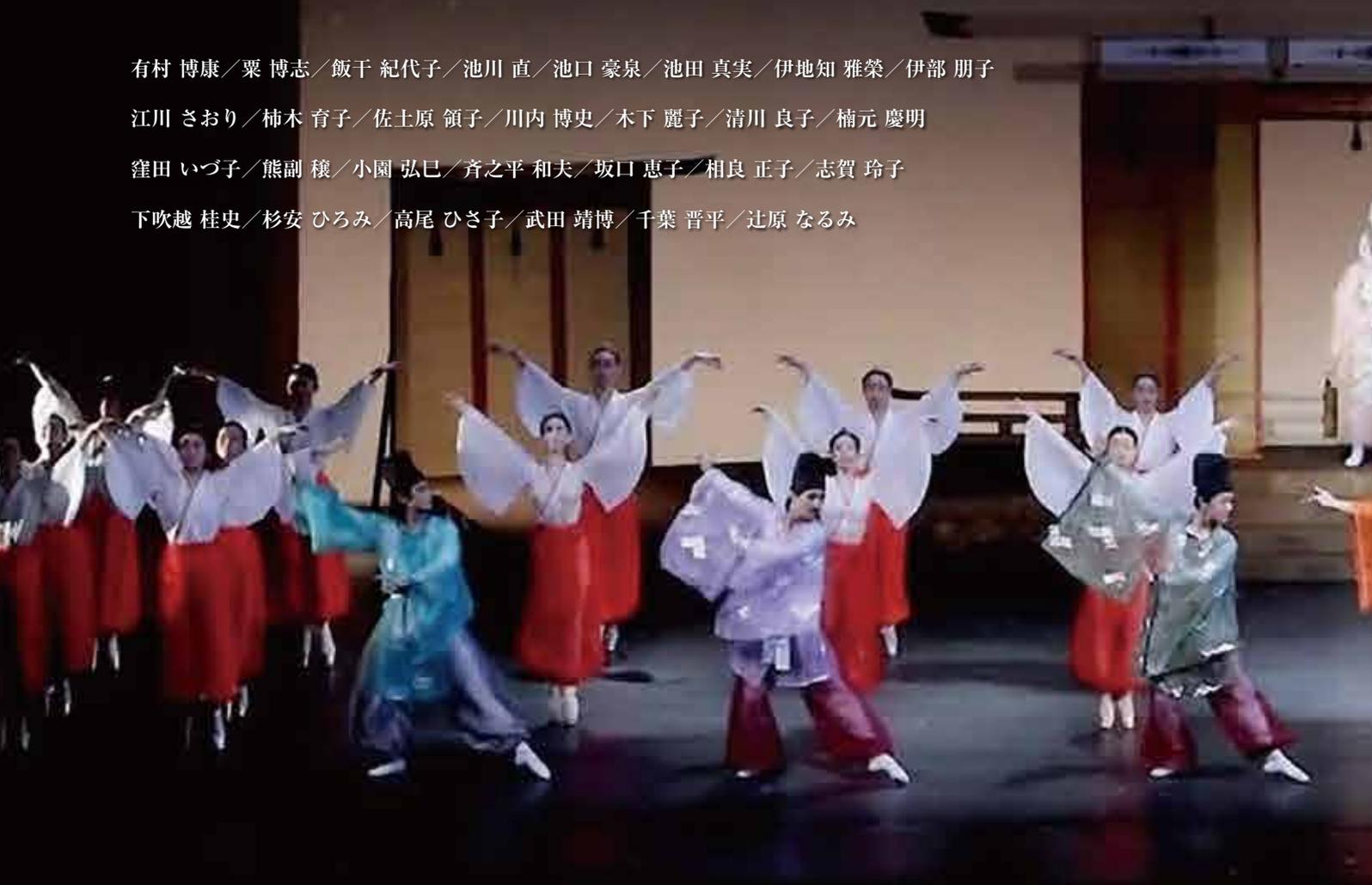


Organization Members [団体会員]

Support Members

【後援会会員】 ※五十音順 ※匿名会員を除く(令和5年6月現在)

有村 博康 / 粟 博志 / 飯干 紀代子 / 池川 直 / 池口 豪泉 / 池田 真実 / 伊地知 雅榮 / 伊部 朋子
 江川 さおり / 柿木 育子 / 佐土原 領子 / 川内 博史 / 木下 麗子 / 清川 良子 / 楠元 慶明
 窪田 いづ子 / 熊副 穰 / 小園 弘巳 / 斉之平 和夫 / 坂口 恵子 / 相良 正子 / 志賀 玲子
 下吹越 桂史 / 杉安 ひろみ / 高尾 ひさ子 / 武田 靖博 / 千葉 晋平 / 辻原 なるみ





Individual Members [個人会員]

中尾 竜馬 / 中島 綱子 / 永田 陽子 / 中野 成博 / 中満 久里 / 野ヶ峯 勇 / 野中 謙三 / 畠中 史子 / 濱田 隆弘
 原口 浩一 / 原田 理幸 / 平峯 靖也 / 福本 出 / 藤崎 典子 / 潤脇 弘子 / 古川 明子 / 古川 雄三
 前田 芳實 / 前屋敷 和宏 / 松下 慎子 / 松島 裕恵 / 松元 哲郎 / 真辺 ひとみ / 南 しんぼう
 八ヶ城 美保子 / 吉井 典子 / 米澤 傑 / 米盛 公治 / 若松 博文 / 渡辺 陽子



Schedule

2024 年度 活動予定

- みんな初めてのプレバレエ体験会
 - [5月4日(土)] 子どものためのプレバレエ
 - [5月5日(日)] 大人のためのプレバレエ (白鳥バレエ本部 照国スタジオ)
- 青少年のための芸術鑑賞事業 鹿児島県内巡回公演
 - [5月22日(水)] 鹿屋市立寿小学校
 - [6月4日(火)] 鹿児島県立指宿特別支援学校
 - [6月27日(木)] S Sプラザせんだい
- ★ 白鳥バレエ創立75周年記念定期発表会
 - [8月4日(日)] 「くるみ割り人形」全幕 川商ホール／第1 (鹿児島市民文化ホール)
※後援会の皆様には、御招待券をお送りいたします。
- 後援会交流の夕べ
 - [9月12日(木)] 会場：山形屋 7階／山形屋食堂
- 芸術家派遣プロジェクト 白鳥バレエ学校公演
 - [10月予定] 会場未定
- 白鳥バレエ創立75周年記念公演
 - [11月30日(土)] 「Life Life Life!!」～白鳥の航路～ swan route 川商ホール／第1 (鹿児島市民文化ホール)
- 白鳥バレエ創立75周年記念祝賀会
 - [2025年3月9日(日)] 城山ホテル鹿児島島／エメラルドホール

※2023年 8月 発表会

Activity Report

2023 年度 活動歴

- みんな初めてのプレバレエ体験会
 - [5月7日(日)] 白鳥バレエ本部 照国スタジオ
- 青少年のための芸術鑑賞事業 鹿児島県内巡回公演
 - [6月8日(木)] 風テラスあくね(阿久根中・鶴川内中・三笠中)
 - [6月19日(月)] 伊佐市立羽月小学校
 - [6月20日(火)] 鹿児島県立牧之原特別支援学校
- Kバレエカンパニー バレエマスター講習会 [7月8日(土)・9日(日)] 会場：白鳥バレエ 照国スタジオ
- 後援会交流の夕べ [7月27日(木)] 会場：山形屋 7階／山形屋食堂
- 第74回白鳥バレエ定期発表会 [8月20日(日)] 会場：宝山ホール (鹿児島県文化センター)
- 白鳥バレエ学校公演 芸術家派遣プロジェクト [10月19日(木)] 会場：鹿児島市立伊敷台中学校
- 公益社団法人日本バレエ協会九州南支部 「第31回ジュニアバレエフェスティバル in 鹿児島」 [3月31日(日)] 川商ホール／第1 (鹿児島市民文化ホール)

※2023年 8月 発表会

Access

アクセス

照国町スタジオ 近郊マップ



※鹿児島市電 天文館通駅 徒歩7分／高見馬場通駅 徒歩7分 ※バス停 高見馬場・天文館 徒歩7分

【サテライト教室】

■敬愛教室	〒892-0846 鹿児島市加治屋町 5-6 敬愛幼稚園内	子どものためのクラス（在園生対象）	【土】
■谷山教室	〒891-0108 鹿児島市中山1丁目 6-1 つばき幼稚園内	子どものためのクラス（在園生対象）	【金】
■セイカ AMU 教室	〒890-0053 鹿児島市中央町 1-1 セイカスポーツクラブ AMU 店内	子どものためのクラス（低学年・高学年）	【火・木】
■始良教室	〒899-5431 始良市西餅田 364-1 イオンタウン始良店内	大人クラス、キッズ（3歳～小2）ジュニア（小3以上）	

 白鳥バレエ 〒892-0841 鹿児島県鹿児島市照国町12-12 2F PHONE : 099-222-6536





est.1949

www.shiratori-ballet.com



website



facebook



instagram



LINE



YouTube